

---

# Roman holiday

たるたるきのこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Roman holiday

### 【Zコード】

Z2154L

### 【作者名】

たるたるきのこ

### 【あらすじ】

この世界はいつたいなんだ？

元の世界からひょんなことで異世界へ

ファンタジー世界での日々！

## What? (前書き)

拙い文ですががんばります

思つておで書くのいろいろ設定が……（笑）

どうぞよろしくお願ひします

What?

俺はまだよくわからない

何故この世界に来てしまったのかが

元居た世界では俺は普通の高校生だった

気さくな友達

口うるさい先生

家に帰れば、いつも優しい笑顔で出迎えてくれた母

頼りになる無口な父

少し生意気な妹

そんな当たり前だったことも今では思い出になっていた

今の目の前の光景はどうなのかととことうと

くるつと見渡せば、立派な彫刻入りの柱、赤いカーペット、どこでかい扉や急ぎ足のメイドさん達が目に入る

ふと上を見上げれば、まばゆく輝くシャンデリア、天使などが描か  
れているとても高い天井

そつ

今俺は豪華な屋敷にいる

さて、こっちの世界に来る前の事を説明しないとな

よくよく考えるとこっちの世界に来てしまった原因は一人の女の子  
に因るものなのかもと俺は思つ……

今でもやたら鮮明に覚えてる

学校帰りに友達といつもの通り寄り道していた俺

その日は商店街で軽い食べ歩きをしていた

先に言つとくが俺は一ートじゃないぞ

ちゃんと休日だけだが引っ越しのバイトをしていた

まあそんなこんなで帰るとここ信濃ひらがかった

その時、俺ともう一人神田つて奴と一緒に帰つてたんだ

神田は一言で説明するなら、「喋らなければ、イケメン」これは皆が認める神田の形容詞だ

ちなみに神田は家も隣でずっと幼なじみ

いわゆる腐れ縁つてやつだ

で、その神田が「やべえ向こうの歩道にめっさかわいい女の子がいるわ」と俺の肩を叩きながら騒ぎ始めた

そして神田は「逝つてぐる」と言つて向こうの歩道へ走つていった

その時はまだ赤信号だったが車は遠くを走つていた

向こうで神田が頑張つてゐるのを見て、俺も向こうへ

話しているところに入つて、くのは無粋なので俺はガードレールに座つて待つていた

すると女の子が俺のところへ来て彼女のポケットから何かを取り出し、俺の制服の胸ポケットに入れて一つ会釈して立ち去つた

強引な理屈だが、「目的は始めから俺だった」それが彼女に対する第一印象だった

神田は何を受け取ったのかしつこく聞いてきたが、答えないのがいつも事なのでスルー

そして帰宅

神田の部屋と俺の部屋は隣合わせになっている

これがかわいい女の子だったらと恨むが仕方ない

そしていつものように互いに窓を開けてトークタイム

少し経つて神田が今日もうつたモノが何だったのか聞いてきた

しかしここで見てなかつたので神田と一緒に見ることに

それは一枚の紙だつた

アドレスと電話番号が書いてある小さなメモ紙。

神田はあの女の子の連絡先だとはしゃいでたが、さすがに見ず知らずの人にはいきなり自分の連絡先を渡すのは怪しいので俺は連絡しなかつた

しかし神田は連絡したいといつので紙を渡した

そして次の日から神田の様子がおかしくなつた

いや元からおかしいが、何といつかキモいに拍車がかかつた

皆そう思つただろ?うな

神田に直接聞いてみたところ「フツ…………聞いて驚け。実は昨日の  
女の子が彼女になりましたwYahoo!」と立ち上がりながら大  
声で

それを聞いたクラスの雰囲気が、ざわ……ざわ……になつたのを覚  
えている

神田のポジション「イケメンだけば彼女無し」が今見事に変わった  
からだ

まだホントに彼女がいると信じたわけでは無い

なので家に帰つたらホントかどつか聞いてみる」とこした

学校が終わり俺は家へ帰り、神田が帰つて来るのを待つていた

しかしながら来ないので俺はパソコンに電源を入れ、ネットサーフィンタイム

いつの間にか7時を過ぎたあたりになり、やっと神田は帰つて來た

俺はパソコンに田をやりながら耳だけ神田の方へ意識を置いていた

すると神田の様子がいつもとは違う事に気づいた

いつも俺と神田は部屋に着くとまず窓を開ける

そして話をする

神田が窓を開けたところまではよかつた

しかし、なぜか神田以外の声が聞こえてきた

俺は慌てて神田の部屋を覗く

するとそこにはあの女の子がいた

神田は二タ二タしながら俺にこう言い放つた

神「おや、居たのか！ハハハ、彼女うちに来たいってきかなくてさ  
wまあ君は気にせずネットサーフィンしてたまえww

あのわざとらしく言い方をする顔をおもいつきりぶん殴りたかった

神田と長年一緒にいて一番づいた……

そんなこんなである女の子が神田の彼女だつてことは証明された訳だ  
チクショウ

その日の夜、家の近くのコンビニに行って買い物済ませて帰つてくれる途中にある歩道橋にあの女の子が一人でいた

神田は自分の彼女を送つてやりもしないのかと頭の中で責めながら  
歩道橋の階段を駆け上がり、女の子の元へ

「…………どうした？神田は送ってくれないのか？」

そつ尋ねると返事はこなったが彼女は「こちらを向いた

俺は歩道橋によつ掛かった

「…………ん？」

よくみると彼女の唇がわずかに動いてることに気づいた

そして彼女は「…………」の世界は好き？」と俺に呟いた

いや、彼女の目線は俺とは合つてないから俺に對して言つたことなのかはわからないがここにいるのは俺と彼女の一人なので俺に對してとつていいだう、ということで俺は「どちらかといえば……  
・退屈かな」と答えた

すると今度は「…………違つ世界見たい？」と呟いた

俺にはその言葉が何を意味してゐるのかその時はわからなかつた

そして彼女は何も言わずに立ち去り闇に消えた

次の日の学校に神田は来なかつた

昨日、あの後家に帰つた時には神田の部屋の窓は閉められ電氣も消えていた

あの時は初めての彼女が家に来たからはしゃぎすぎて疲れて寝てしまつたとしか思つてなかつたが、熱出しても学校に來ていたあの神田が来てないのはおかしい

それに昨日の彼女の謎の言動

あこじ背中の毛が立つ感覺を俺は覚えた

# 入口

学校が終わり俺は隣にある神田の家へ寄つてから自分の部屋へ

神田の母親が言つては今日神田はいつも通り学校へ行つたらしく

となると途中で気が変わつたのかも知れない

しかし神田の母親が言つた「……あの子の彼女が迎えに来て出て行つたわよ?」がかなり気になる

彼女が現れてからいろいろ変わつている

神田に何も無いと祈るしかない

…………まあ考えすぎだらうが

夜、神田の部屋に電気はつかなかつた

それから二日間神田は学校へ来なかつた

俺は家に帰つてから少し考えた

いつたい神田はどうしたのか…と

そして俺はあることに気がついた

## あの紙

そつ、彼女のアドレスと電話番号が書いてあるあの紙の存在に

俺は机の引き出しから紙を取出した

よく捨てなかつたと自分で自分を褒めた

そしてアドレスの下に書いてある電話番号に電話をした

ツ　　ツ　　ブルルルル

電話の呼び出し音が数回鳴り、電話が通じた

? 「.....はい」

声の主は確かに彼女のものだった

「…………正直に答えてくれ。神田を…………ビリした

そのとき質問に彼女は答えなかつた

そしてまたあの歩道橋で会うといつこいつになつた

歩道橋に着き、俺は周りを見渡した

まだ彼女の姿は見当たらなかつた

俺の下を走り去っていく車に少しの間田を落とし、また周りを見渡すと身体をひねった瞬間、彼女の姿が俺の前にいるのが目にに入った

「…………來たか…………で、神田は？」

俺は彼女に聞いたが彼女はまた俺の質問を無視して「…………この世界は好きか？」と呟いた

「まず俺の質問に答えるーそれに何言つてんのか訳わからんねえよー」俺はついつい怒鳴ってしまった

彼女は「彼は元に戻す」と言い、さらにこう続けた「…………貴方は選ばれた人間…………違う世界を見たいか？」

話の急展開に焦る俺

「なんなんだ一体…………お前、頭いかれてんのか？」

非現実的発言に戸惑いを隠せない

彼女は質問を変えると云ひ、俺にナイフのよつた鋭利な何かを首に突き付けこうと言つた

「貴方は近いうちに、死ぬ。」

「…………なんの冗談だよ…………つ」

「本当の事よ。このまま帰り、近いうちに死ぬか、今私に殺されるか、違う世界へ渡るか選びなさい。」

「え、選ばれたって…………誰に選ばれたんだよ…………つー。」

「私によ」

「…………はー?」

「だから、私が貴方を私の本来いる世界へ連れてつてあげると誓つているのよ」

「…………なんで俺…………なんだよ…………?」

「貴方には不思議な力を感じるからよ……貴方はこの世界にいる人間というより私のいる世界の人間に近い雰囲気を感じる」

彼女は俺より頭一個分くらい小さいのだが言動と雰囲気で俺より大きく感じ、俺は気圧され力が入らない

「さて、どうするのだ?」

「…………離してくれ。少し……考える」

そう告げると彼女は鋭利な何かを首から離し、俺は自由になつた

「…………なぜお前は俺が死ぬことを知つていいんだ」

「私の世界の人間ならこいつらの世界に来たらそれくらい普通にわかるわ」

「…………？」

俺はよくわからない発言に首を傾げる

「そうね…………簡単に言うと私側の世界の、私がいる国とは別の国の暗殺者によって殺される」

「…………俺が殺されなきやならない理由なんかあるのかよつー?」

「それはまだ知らないていいこと…………いや、教えるべきか……  
彼女は少し考えこんでから俺の顔を見つめ、こう告げた

「貴方は…………私側の世界で重要な人物になりうる人間なのよ」

俺は何かいろいろ省略して話してゐる感じをかなり受けた

(つか未来の重要人物になり暗殺者を送られるって、ビルやのタ  
ーミネーターの話じゃねえか)

「つか…………どちらにしろ俺は死ぬ。だから否応なしにお前の世  
界に行かなきやいけないんだろ!」

「まあ…………そうなるな。どうせ死ぬなら少しは人とは違う体験して

から死んだほうがいいだろう?」わば私は優しい案内人でこと

(くつ……なにが優しい案内人だ)

「…………わかつたよ。行くよ。そつちの世界とちうこ」「やつこつた  
途端彼女は鋭利なあれを俺の心臓に刺した

(…………い……つ……てえ……)

「安心しろ。ちや……と……記憶は……ひとつ……やる……」

熱い何かが流れ出る感じがした

それに俺の視界はぼやけ、彼女の言葉も上手く聞き取れない

そしてそのまま俺は歩道橋の上に倒れた

次に気がついた時、俺が初めて見た景色…………広い部屋に一つのベット

そしてそのベットに横たわっていた俺

(……………ん? まてよ。よく思い返すと俺がこっち来た原因は彼女そのものじゃないか。きつといきなりすぎたから混乱してただけだな、うん。しかもかなり理不尽だったし、うん)

れど、やっとまあこんな感じだ

一体俺これがどうなるんだろう……

## 田原め（前書き）

この辺から会話等が結構入ってきます

会話中に「w」等が出現しますが小説らしくなこと言わないので下を  
いふ（――）笑

### 留意点

基本的にはその人のことの中の言葉等です

「」や（）の左隣に書いてあるのは発言者の名前の始め一文字です

始め一文字が重なる場合は名前全部のときもあります

また、今まで一人称でしたがこれからは三人称視点も多々入ってきます

めんどくさい表現かと思われますがそこも楽しんでいただけたらと思います。

ではお楽しみ下さい（^ ^）

## 田覚め

田覚めた俺はベッドから降り、ベッドと窓しかなこの部屋を一周した

窓から外を覗くとそこには、「今までいた世界とは別の世界」というのが本当の話として受け入れられるような景色が広がっていた

整えられた芝生で覆われている庭と呼べないくらい広い庭がまます田に入る

その庭から少しのところには、いままで公園で見たことのある噴水とは格が違う豪華すぎる噴水

噴水を囲むように歩道が作られていて、噴水を楽しむためのベンチもある

( ど ..... ど うこ うい つ や ..... )

そして俺は体の向きを90度反転して部屋の大きな扉の前へ行き、開けた

すると、はたしてそこには立派な彫刻入りの柱、赤いカーペット、どでかい扉や急ぎ足のメイドさん達が目に入る

ふと上を見上げれば、まばゆく輝くシャンデリア、天使などが描かれているとても高い天井

そう

今俺は豪華な屋敷にいる

( す、す げえ ..... ! )

開いた口が閉まらないことは「ことだ」と言いたくなるような、そんな見事なアホ顔で立ちぬく

好奇心に操られ、この豪華な屋敷を探索したくなつた俺

そのとき、俺を見つけて近づいてきた女性が

その女性は身長160後半くらいでとてもスタイルがよろしく（ボンキュッポン的な意味で）、肩をすこし超す金に近い茶髪で軽く毛先が巻いてあり、正に容姿端麗の言葉が似合つ人だった

「あ、あの…………！」はどうでしょうか？

? 「ん?……ハハツ、そつかそつか」

初対面の美女にクスッと笑われた俺は何故かよくわからないが頬を朱らめて照れる

? 「私がわからないのも無理ないな。何せ向こうの世界では妹キャラというのか? そんな容姿だったからなー」

笑いながら言つてゐる美女

しかし俺は「向こうの世界」といつ頃葉を聞き逃さなかつた

「まさかお前…………っ!」

「御明察」

鼻歌まじつの明るい口調のこの美女は、あの女の子

つまつ神田の彼女だった

「ちよっと待て、いくらなんでも見た田のギャップが激し……」

? 「ああ、あれはすんなり接触するために姿勢を変えたのよ」

(うふ。いやまあ…………！ れは「これで田の保養になるが…………／＼／＼)

? 「…………ちよっと、なあーここいらせじこに田で見てるの…………よつ  
！」

鈍い音を鳴らしながら尻をおもこつき蹴られた俺

(…………っ…………まつおつ…………＼＼＼＼)

声に成らない声をあげる

マ「そりゃう、私の姉妹マリー・ルチアーノ。姉妹マリーって呼んでるわ

「……お、俺は槙野 奏

まだ痛む尻を摩りながら自己紹介を済ませた

マ「よろしくね、奏

マ「さてと……つこて来て、奏」

マリーの後について行く奏

(元)しても…………広いなあ

元の世界では一度も来たことが無い豪華な屋敷に、ただただ驚嘆するばかりの様子

そして少し移動したところでもマリーが立ち止まる

マ「奏?入るわよ?」

屋敷の立派さに田を奪われていたからか、いつの間にかゆっくつと歩いたらじへマリーとだいぶ距離が離れていた

奏は急いでマリーの元へ行き、マリーは扉を開け中へ

この部屋はさつさ奏がいた部屋より少し広く、ぬいぐるみや内装的マリーの部屋のみうだ

マリーは「その辺に適当に座つて。なんか食事頼んで来るから待つて」と

マリーは部屋から出て行き一人きりになつた奏

(…………向といつか、とんでもない世界に来てしまつたなあ)

そしてマリーがいなこのをこことて部屋を探索し始めた奏

(趣味だな俺…………まあいいや、めは漢の恥つてもんよー。)

まず手をつけたのがクローゼットだった

(元でもクローゼットも立派だなー。いや)

クローゼットのふともー一般的な広さの二倍はあるだひひひ横幅

そして豪華な服がたくさん掛けてある

(この引を出しまなんだろ)

腰を下ろし、取つ手に手をかけ、引く

(これまで……つ……)

そこには、マリーのとおもじき、いや、マリーのと断定して  
ここへ着が並んでいた

そして奏はパンツを一つ取り出した

(これまで……猫ちゃんの刺繡……)

ゴクリと唾を飲む音が耳に入る

そして奏の心では今、激しい葛藤が起きていた

この不純な行いに対する抵抗心、思春期の男だから仕方の無い興味  
心、マリーが何歳なのかを知りたい探求心

この様々な思いが奏の頭を過ぎる

今、一応イケメンである奏も傍からみたら猫ちゃんパンツを手にとり半分にやけ顔の、明らかに下着泥棒か変態あたりにしか見えない

そしてそこであつたたりと言わんばかりのタイミングでマコーが戻ってきた

マ「奏へ 食事持つ…………」

トレイを持ったまま固まのマコー

奏もまた、固まる

暫く無言で固まる一人

そして「」の異様な世界を先に壊さうとしたのは奏だった

( む、俺は、やれぱできるナ……こかねーーー )

そして口を動かす

「………… や、やあ。かわいい下着穿いてるんだね

また暫く無言の世界へ

( な、何故だ…… 何故喋らない…… も、もつ一度か…… )

奏の口が動くと回りタイヒグドマローがトレイを床にゅうくつ  
と、ゆうくつと床に置いた

そして次の瞬間には奏の意識は消えていた……

(…………ん…………あ…………)

次に意識が戻った時には夜になっていた

(「…………だつけ…………あ、そつか…………違ひ世界来たんだつ  
けか…………」)

今までの出来事を順になぞりてゆく

(マニーの部屋に入つてから記憶が無い…………つ～む)

ムクツヒベツドから起き上がり窓の外を眺める

(月が綺麗だ…………ん？月が見えるつてことは地球に似ている  
どこかの惑星なのか？)

少し考えこんでたが、らうがあかないのでまたベッドに横たわる

(まあ明日マリーに聞けばいいか。…………神田どうなったかな  
……俺の家族は…………クラスのあこづらも今は何してるんだろ  
ひ…………)

いろんな想いが頭を過ぎり、いつの間にか涙が奏の田尻を濡らして  
いた

(みんな…………俺は元気ですよ…………)

そして深い眠りにつき、新しい生活の一 日目が終わった

「エンジヤラス?

時刻は朝

窓から入り込む心地よい風がカーテンを揺らしながら部屋を包む

その風に乗って耳に入る鳥の轡り

ちゅうとひんやつな爽やかな気温

そんな居心地の良い朝に起きたある春

「…………ふあ…………くつ」

欠伸に大きな背伸びを一 つずつ

こんな気持ちの良い朝だから、まだ眠氣眼の奏

「…………まだ七時か…………寝よつ」

時計も持っていないのにさう言つて、またベッドに潜り込む

(気持ちはいいな…………)

と、奏のねむねむワールドに乱入者が

マ「おひさまあめまつー朝だぞ、奏ー」

大きな音をたてながら扉を開け、朝々と声をあげるマリー

そんなマリーをウザった気でベッドの、白へ、あたたかい毛布に丸まって包まる奏

傍から見たらベッドの上の麿があるよだつた

マ「ん? 奏へんはお寝坊さんかな~?」

子供に語りかかるマリー

ベッドの端に座り、毛布に包まっている奏をシンシンと突く

すむと、蚕の繭のよつなそれから、「二度、三度、おひさまへ飛んでいた鳴

き声が聞こえた

それを聞いたマリーは、イヤーと大きな笑みを浮かべ、奏もとこ、蚕の繭に飛び掛かつた

「ほらほら、起きる奏つー。」

レタスの葉を剥くよつい布団を剥がせつとくマリー

しかしそれを必死に防ぐとい、わざと布団に包まる奏

朝に弱い子供とそれを起こす母親との戦いのよついも見える

もちろんその戦いを制すのは母親。つまづマリーが勝利を収めた

「なんだよマリーーー子供みたいじゃねえんだよー。」

布団を剥がされ少し不機嫌な奏

マ「あら、私これでもあなたより大人のつもりよ？それに……朝に弱いあなたの方が子供じやない……ねえ、奏？」

図星をつかれた奏

「うう…………なりマリーは年こくつなんだよっー。」

マ「え？あなたの一つ上よ？」

すると、がばっと体を起き上がりせ、今のマリーの発言に耳を疑つ奏

(な、なんだって……ー？俺の一つ上でこの容姿つて…………)

どうみても奏より一つ上には見えないマリーの大人っぽさ

そして知らず知らずのうちに視線がマリーの顔から下に移る奏

マ「今度はビニみてんの…………よつー。」

パチーンと乾いた心地良い音が部屋に響く

マリーの小さめな手の形がくつきつと、ハンコを押したかのよつこ  
奏の頬に赤い跡がついていた

「な、なにすんだよお…………」

わつかのビンタでベッドからずり落ちた奏

マ「また私をこやじっこ田で見てるから当然よつー。」

ふこのと顔を背けるマニー

すこまほんじへりしながり起きあがむ泰

マ「あ、わつわつ、朝食食べたら出かけるわよ」

そひえたマニーはベッドから降つ、わたりてひつこして来てと囁つ  
た

さて、朝食を済ませた二人が何やらお話を最中のようだ

「で、今日出かけるって言つてたがどこに行くんだ?」

ママ「ふふつ、私の知り合このところ」

朝っぱらからなんでこんなに機嫌がいいんだと言いたげな顔の奏

そんな奏を気にもかけずルンルン気分で続けるマリー

「マ、もう行くなよ」

「…………はいはい」

腰痛持ちの年寄りのよつて重く腰を上げ、マリーについて屋敷を出て行く

さて、屋敷の門を出て一番初めに奏が目にした物

これまた立派な馬車だった

マリーが座席の扉を開け、

先に乗り込む

(おおむね)……………これ俺ん家にあった車より乗り心地良さそう  
だな)

ところは、座席のことだった

しつこよつだがこれもまた高級感漂つ、いや、高級な内装であり、  
座席なんか見るからにふかふかな感じを受けるくらいだった

(おおむね)……………や、柔らかいいい……

そしてふかふかな尻の感触を味わいつつ、マコーに尋ねた

「なあ、マコーの親父さんってかなり権力の貴族がなんかなのか?  
こんな高そうなものばかりだし…………」

マ「父親か……………残念ながら私は孤児なのよ」

「さうか……悪かった」

いつも明るく振る舞つてゐるマリーにも辛い過去があると聞いて驚いたし、詳しく知りたいがそこはノータッチが礼儀だらう。と、考えた奏

（俺にも辛い過去はある…………とは言つてもまあ小学生の頃、頑張つて大をばれずによると必死こいてる時、なんとかばれずに個室に入つたは良いが、用をたし終え、ズボンをあげて、流そうと足でレバーを押そうとした時自分の足に他の誰かのはみ出して残つていた産物がついていた。まさにミイラとりがミイラになるとはこのことだと小学生の時に思い知つたくらいだが。ハハハ…………）

訳の解らぬ長い回想を終えた時にはもう馬車は動いていた

「…………そいや、知り合ひって誰なんだ？」

「あ、今つかひのを楽しみて」

急かす奏を受け流すマリー

馬車を走り出す」と一時間弱くらこだらつか、小高い丘を走っていると遠くに街が見えてきた

その街は、通ってきた途中にあった小さな町とは違ひ、とても大きな、いわば都のよひな街だった

「あ、あれで行くのか……？」

「マリ」

(あんなすゞい街にいる知り合いつて……)

馬車は進み、ぽつぽつ家も現れてきた

窓から外を眺めると、

今まで見てきた景色と違はずぎてやはり異世界に来たんだとびっくりして実感してしまつ奏

それからもう少し走らせ街中に入つて行く

「すげえなこじゅや……」

古代ヨーロッパのような魅力溢れる仔まごの家や店

店の看板についてる鎧もまた、魅力の良い味を引き立てる

マ「そんなキヨロキヨロしひやつて……そろそろ着くわよ?」

奏を見てクスッと微笑んでいる

もつ少し石畳の道路を走ったところで、馬車は停まった

マ「ついたわよ、奏」

マリーが先に降り、奏も続く

れて、やっと田舎地についた一行

その田舎地とは、マリーの屋敷より大きな屋敷だった

屋敷の玄関まで歩いてゆき、マリーは挨拶しに行くので「ここにいるよつ告げられた奏

「いじもすんげえでかい屋敷だなオイ…………それで、どんなヒゲ面のオッサンが出てくやう」

奏には、金持ちのオッサン＝ヒゲ面のイメージがあるらしい

そして、少し待つているとマリーがやってきた

そして屋敷に入ると、メイドさんがズラリ

「おお……」

こんな大人数に迎え入れられたのは初めてだったからか、たじろぐ奏

「マ、ついて来て

少し歩いたところにある部屋に入るときには、さつき秦が予想した通りのヒゲを生やした端正な顔立ちのオッサンと呼べないオッサンがいた

まだ年齢も40代なのではないだらうか

マリーと秦はその端正な顔立ちのオッサンもとて、おじ様と挨拶を交わした

？「私、この屋敷の執事のガーデンと申します」

深々と礼をするガーデン

「ここは、ガーデンさんはこの屋敷の主じゃないんですか？」

ガ「左用でござります。主は今……」

マ「さて、今日はアリスに用があつて来たのよ 呼んでもいいかしら？」

ガーデンの話を途中で切ったマリー

そのアリスとやらを行ひに行ってしまったマリー

「マリーとアリスって人はそんなに仲良しなんですか？」

ガ「マリー様は昔からのアリス様のお友達なのです。出会いは小さい頃のパーティーでございまして……」

少しの間ガーテンと奏の会話が続く

会話は扉が開く音によつて終わった

音の発信源の方へ首を曲げるとアリスらしく少女の身長150前半だらうか  
小柄な美少女がいた

マリーの身長からするとアリスらしく少女の身長150前半だらうか

マリーは美女、アリスは美少女といつたところか

ところでもさつきのガーテンとの会話で得た情報からするとアリスの年齢は奏と同じ、マリーの一つ下らしい

(またやべえ美少女だ……)

といえず

さて、アリスと対面した奏だが、マリーからあることを告げられた

マ「奏、あなたにはアリスと一緒に学校に入つてもううわよ」

「え？」

マリーは奏の耳に口を近づける

マ（あなたが異世界から来た人間つてことは極力こちらの世界の人  
間には隠しなさい）

「わ、わかった……」

マ「よし アリスを守つてあげてね。この子かわいいからすぐ下賤な男が近づいてくるのよ」

(まあここんだけかわいナリヤ近づきたくなる『氣持ちもわかるな……』)

ア「もう少いマコーラりつ、私はもう少し甘じやないわよ~。」

まつペを脇りませ、唸るアリス

なんとも愛らしこ仕草だ

それを聞いたマリーはニヤーっとした顔とジト目を合わせた、なんとも形容しがたい表情でアリスを見つめる

ア「な、なによつ……」

マ「なんでもないわ」

ア「なによ、マリー！」

仲の良い姉妹のようにも見える一人

(やつぱり付き合こ長いと仲良いんだな……)

それを見守る奏とガーテン

「で、マリー。用はどいたんだ？」

じゃれあつてゐる一人に横槍を刺す

マ「そうだったそうだった…………ガーテンさんこちよつと頼みがあるのよ」

ガ「は、なんでございましょう」

マ「学校で私はアリスの傍に居てあげられないから奏を連れて来たの。だから少し護身術を奏に叩き込んで欲しいのよ」

「おいおい、俺はお守りかよ…………」

ア「私、こんな見ず知らずの人には護られるなんて気が引けるわ」

マ「アリスに何かあつたときだけでいいわ…………アリスは私にとつて妹と同じなのよ。だから、ね?お願い、奏。」

(くそり…………そんなに頼まれたら断れないじゃんよ…………)

「……………わかったよ

渋々引き受けた奏

ア「……………もうっ、マリーは私の言つことなんて聞かないんだ  
ら……」

アリスも渋々承諾した

馬の大地を蹴る音、揺れる座席

マリーと奏は帰路についている

マ、「どうだった、今日の感想は？」

「ああ、じつぴどくやられて身体がガタガタだよ……」

といつのも、さつきまでガーデンと手合わせしていたからだった

「あの人……めちゃくちゃ強いんだな……」

「さうね……ガーデンさんももう少し強いけど、あなた、じこみても隙だらけだったわよ~」

痛いところを指摘され唸る奏

「…………だってよお、俺にしてみれば手合させだって初めてだぜ?」

ガーデンとの手合させを思い返す奏

畳のよつな少し柔らかい床が敷き詰められた訓練部屋の一角で手合せが行われていた

「へ……むつーーー」

床から起き上がりながら声を上げる秦

ガ「む…………つーーー」

起き上がりながら一気に懐へ詰める

(……………今はいけるっつーーー)

ガーデンの襟をつかんだと思つた秦だが、その手は空を切つていた

(……………あれつーーー?)

腕を引っ張られた感覺、さらに秦の視界は天井へ向いていた

「…………」

背中から床に落ちた奏

(一 体何が起きたんだ……？)

説明すると、水戸〇門の助〇ん、角也〇が、襲い掛かる敵の腕を掴んでぐるごと田舎を回転させるアレをガーデンが使ったのであった

マ「まあやつだナビ」「アリスを守れるのかしい」

溜息を一いつ瞬

「…………俺、アリスを守るなこでやつたくながよつ。」

「マ、あ、やう。なう学校も行く必要無こわね」

「ぐつ…………てか、俺はお守りで学校いくのかよ。」

「マ、まあやうなるわね」

「なう…………行かなくてもいいわ…………」

「マ、あ、そう?かわい~い女の子たくさんなのにね。残念。じやあ私の執事でもやつてもらおうかしら~あ、でもこんなひ弱じや務まらないか!」

ぼうへそ言われる奏

「だ、誰が行かないって言ったよーそれのが、その…………葉の  
綾取りだよっ!」

マ（私の期待を裏切らない単純ぶりね……………）

ガタガタ揺れる馬車の中の一人に、それからしばし沈黙の世界が流れた

「てか、俺はもとの世界に帰れないのか？」

ふと切り出した奏

マ「無理な話ね」

「なら、なんでマリーは来れたんだ？」

マ「ある人からの指令で送り込まれた……………これ以上は話せないわ」

「ふうん……」

腑に落ちないが話せない以上探るのも悪い氣もするし、何より身体が悲鳴を上げすぎて早く寝たい気分の奏だった

「マ」「悪いわね、奏。こちら側の勝手な意見で連れて来て……」

「まあ確かに他の人とは違う体験できたからいいよ。帰りたくないつたらその人に頼んで帰らせてもらつ」

「マ」「そうね……」

どこか悲しげな表情で外を見つめるマリー

少ししたら屋敷が見えてきた

奏は屋敷へ着いたらすぐベッドへ潜り込んだ

マ、ゴメンね…………奏。（

お買い物。お買い物？

「寂しい」が似合つ廃れた町並み

地面に横たわる浮浪者達

微かな嫌な臭いも漂う

そんな場所に一人、青年がいた

「……………ビー……………だよ……………！」

その青年は奏だった

汗を流しながら石畳の上を駆け巡つてゐる

びひこひなつたのかといつて、時を戻すこと朝へ

今日の朝はのびのび起きたと言わんばかりの大欠伸と背伸びをする秦

ところのも、こつもマリーが秦を起こして（悪戯して）くるのだが、  
今日せびひこひとかマリーは部屋にすら来なかつた

「ふああ…………たまこゆづく起きたるとなんか幸せに感じじるな  
」

起りやれるのではなく、自發的に起きたことに喜びを感じる秦

起<sup>おき</sup>はじめてマリーを厄介者みたいな扱いをする奏だが、普通に考<sup>かん</sup>えてみれば美女が毎朝起<sup>おき</sup>はじめてくれるのだから男なら幸<sup>さい</sup>いの上な<sup>まへ</sup>しことなのだが

「今日は俺がマニーを起<sup>おき</sup>はじめてやるか……」

親切な発言にも聞<sup>き</sup>えなくてはな<sup>まへ</sup>いが、一<sup>い</sup>やつ<sup>い</sup>奏の顔を見たら誰もそつは思<sup>おも</sup>わないだろ<sup>う</sup>

いや、女性の部屋に勝手に入ること自体まずいが

ベッドから降り、腰を伸ばす

「キッキツヒトシセイガ鳴る

(「の「キ」が気持ち良いんだよな

身体を伸ばし終え、こぞマリーの部屋へ行こうとした奏だが、行くまでもなかつた

とこつのはマリーが扉を開け、入つて來た

マ「奏つ、今日は買い物行くわよー。」

額に手を当てながら、また唐突に……と、ぼやく奏

仕度して馬車に乗り、あの街へと繰り出す一人

「 来るのは一度田だナゾやつぱつ興奮するなつ 」

マ 「 そつへ・まあ 奏には珍しい景色だもんね 」

「 ああー…………で、 買い物つて何の買い物なんだ? 」

マ 「 あなたも通う私達の学校は寮制なの。だからそのためのこころの準備しないといけないから、今日はそのための買い物なの 」

「 ふんふん…………しかし俺金無いぜ? 」

マ 「 こっちの世界へ連れて来たのは私じゃない、だから心配いらぬ 」

そんなこんなで馬車から降り、 徒歩で店を当たる

道からショーウィンズウッドの中を見ながら歩いてる奏だが、 その

目は新しい物を見てはしゃぐ子供のよつな目だった

剣やら鎧やら、奏にとつてみれば空想の世界でしか味わえなかつた不思議な感覚を直に、自分の身体で体験しているからだろう

「マリー、あれは何だらう？」

顔をキヨロキヨロしながら歩いていたからか、向こうに人だかりが出来ているのを見つけた

マ「何かしら、有名人でもいるのかな？」すると、ドドドドドドと奏達の後ろからオバ様の大群が押し寄せてきた

「ちよ…………ねいおいおこおい！わっ！」

オバ様の波にのまれた奏達

次々と迫り来るオバ様達

「いでつ！ いでつ！ いででつ！」

そんなオバ様達の肩やら足やらが奏の身体にぶつかって行く

何とか抜けだし、オバ様ウェーブも過ぎ去った

「つてあれ……マリー？」

さつきいた所にマリーの姿はなかった

「おーい・マリー？」

辺りを見回してもマリーの姿はない

「……………ド！」……いつたんだ……？」

からに辺りを見回していると、誰かの叫び声が聞こえた

叫び声が上がったらしい方向へ顔を向けるとそこには見覚えのある  
ような姿が

「あれは…………アリス？」

アリストラしき女の子が男に手を引っ張られ連れて行かれそうになつ  
ている

「…………オイ！」

助けるために駆け寄る泰

すると男は女の子の腹部に拳を決め、気絶した女の子を肩に担いで路地裏へ消えた

急いであとを追つ奏

「くわっ………… 担いで逃げてるからわざ遠くは無いはず…………」

奏も路地裏へ入ろうとすると、横から人影が

? 「奏君……」

それはガーデンだった

「ガーデンさん……」とはやつぱつたるのはアリスか……

ガ「はい。私としたことが迂闊でした……アイスクリームが食べたいとお嬢様に頼まれ、店の中へ買いに行つてゐる隙に……」

ガーデンの手にはアイスクリームが握られている

「ガーデンさんっ、とにかく捗しましょー!」

ガ「奏君、これを……」

ガーデンは奏に何かを差し出した

「これは…………笛?」

ガ「はい。お嬢様の為の物なのですが、いかんせん着けたがらなくて……見つけたらこれで知らせてください」

「わかりました!じゃあ一手につ

奏とガーデンは別々に駆け出した

奏の石畳を蹴る音が「じだまする

路地裏を駆け巡る

「…………どい…………だよつ…………！」

長い距離を走っているから息が切れてしまい、たすがに足を止めて  
呼吸を調える

一回、二回、三回……小刻みに、一定のリズムで奏の肺に酸素が  
送られていく

少し辺りを見回していると、他の道から男が走つて行くのが見えた

「よしつ、あと少しだ……！」

太ももを二回叩き、また駆け出した

路地を男と同じ方向へ曲がる奏

少しづつ距離を詰めていく

「…………くつ…………！」

脇腹の痛みが奏を苦しめる

あと20m辺りまで詰めたところでまた男が曲がった

「…………よ、よしつゝ追い詰めたぞ！」

曲がつた先は行き止まりだつた

くそつー！と男が声を漏らした

男がアリスを石畳の上に横たえ、奏と向き合つ

（あんだけ走ったのに息を乱してないだと……………）

男は一回大きく息を吸つただけで呼吸を調えたようだ

一方奏はまだ息が乱れている

(…………ま、まざいな…………)

「キ」キッと男の手から音が聞こえてくる

(…………そ、そつだつー。)

ポケットから笛を取り出し、吹いた

? 「何のつもりだ…………」

男が問い合わせてきた

「しょ、召喚するのね…………」

? 「な、なにつー? 召喚獣だとー。」

男は慌てて奏に襲い掛かつてきました

(…………ガーデンさん…………早く…………)

奏も構えるが既に男の膝が腹へ向かつていた

「…………ぐつー」

何とか直撃は避けたものの、体勢を崩してしまった

(くそっ…………！)

次に迫り来るは男の右拳

避けられず、右拳は奏の頭に直撃した

石畳の上に倒れ込む

奏が立ち上がりとする時には男の攻撃がまた迫っていた

今度は奏に止めを刺す勢いの足踏み

倒れ込んでいる奏の頭目掛けての攻撃

当たつたら一たまりも無いだろう

奏は何とか横に転がり、避けた

避けたと同時に立ち上がる奏

しかしあつさ受けた攻撃のせいで、足がふらついている

(…………ガーデンさんが来るまで…………持ちこたえないと!…)

奏は男にタックルをかました

そのまま抱き着く

男は奏の背中に肘打ちを次々と叩き込む

一発、二発、三発……と次々に肘打ちを食らつ

さらに膝蹴りも加わり奏の体力は限界にきていた

(…………意識が…………持たない…………)

奏の意識が飛び始めた時、男から力がガクンと抜けた

(……………?)

? 「お待たせしました、秦君」

ガーデンがやっと着場

ガ「これ、持つて下さー」

そうじつて渡したのはアイスクリームだった

(……………なんて律義な…………)

男から離れ、そのまま石畳のうえに座り込む秦

さて、ガーデンと男との闘いが始まった

男の動きは既に知っているかのようにガーデンは男の攻撃を華麗にかわしていく

(…………す、すゞ……)

その神懸かつた動きに驚嘆の奏

男の攻撃はガーデンには全て当たらず、ガーデンの攻撃ばかりが男に決まつていく

次々と攻撃を食らい男は膝を石畳の上につけた

ガ「さて、お嬢様を誘拐しようとした理由を教えていただきましょうか？」

ガーデンが尋問を始めた

奏はアリスの元へ行き、肩に右手を回し上半身だけ起<sup>こ</sup>した

「…………アリス?」

声をかけながら軽く揺すると、うつすらと目を開けた

ア「…………あ…………なんで私ここに…………」

「ガーデンさん、アリスが氣がつきました!」

ガーデンにそう告げてアリスに向き合つ

ア「…………あれ…………奏…………?」

うとうと首を縦に振り、奏はアリスにアイスクリームを渡す

あれだけ動いたり時間が経つていうのにはアイスクリームは買つた時と同じ形で残つていた

「ガーデンさんが買っててくれたよ」

目を醒ましたばかりにアイスクリームを渡すとは多少気はきかないがアリスはそれを受け取る

そしてアリスは食べはじめた

ガーデンはまだ尋問をしてくるらしい

5分くらい経ち、アリスはアイスクリームを食べ終わつた

ア「美味しかった……………」ついでに、いつまで触つてんのよ  
！」

ところのは秦がずっと肩に手を回してくることにアリスの気がふれ  
たようだ

奏を突き飛ばすアリス

ア「バカ！エロー変態！」

散々言われる奏

(そんなに言わなくって…………)

助ける為に頑張った奏としてはお礼の言葉一つくらい欲しいところ  
だった

ガーデンが男の手を縛つて、二人の元に来た

ガ「お嬢様。今田のところはもう屋敷に戻りましょう」

ア「そうね…………じゃ、帰りましょ」

ガーデンが奏に、ついて来るよう促した

ア「…………なんでこの変態スケベ痴漢がついて来るのよ」

ガ「お嬢様、奏はお嬢様を助ける為に必死になつてくださいました。  
そのような発言は、失礼ですぞ？」

ふくーっと頬を膨らませ、唸るアリス

(はあ…………なんか疲れたよ…………)

まだ男に痛めつけられた身体が悲鳴をあげている

路地裏から出るとガーデン達と別れ、奏はマリーを捜し始めた

ちなみに男の身柄は役人に引き渡すそうだ

奏がマリーを捜す前にマリーが奏を見つけ、駆け寄つて來た

マリーの手には荷物がたくさん掛かっていた

マ「奏ー…どうもつづき歩いてたのっー。」

「え、いや…………あの…………」

奏が今までの行き先を説明する前にマリーがまた話しだした

マ「罰として荷物全部持つてねー！」

マリーの手に掛かっている荷物を全部奏に押し付けた

(……………今日は厄日だ……………)

荷物の量からしては軽かったが心も身体もボロボロの奏にはかなり痛手の攻撃だった

(……………買い物なんか嫌いだ……………)

そこから馬車まではそつ遠くはなかつたのが奏ことつて唯一の救い  
だつた

どつも、秦です

さて、今俺は学園生活をたのしんでいる

この世界に来て、またかまた学園生活を送れるとは思つても、こ  
なかつた訳だが

俺は今、とても幸せだ

理由?

そうだな……………まず第一に環境が違うー。

元居た世界の高校、窓から見える景色もそこまで悪くなかったがやはり見慣れた物ばかりだったしな

第一一 かつたるべて、生活に必要なやつな授業じゃ あない！

魔法だつたり 錬金術だつたり……俺は使えないにしろ、ワクワクするし 楽しそぎる！

せうじとかわいい女の子もたくさんいるし、転入生ってこといろいろハーレムだし、ニヤニヤ止まんないし、俺イケメンだし、俺がはにかむと女の子倒れるし、おかわりじやなくてお触り自由だし、ちゅうひゅしまくらだし……

とまあ何と言つか最高の学園生活！

つて期待してたんだがなあ……

現実はそれほど甘くなかつたよ。うん

なんでこんなこといつのかつて？

男の口マンだよー。うん

はあ…………そろそろ目を開けないといけないみたいだ……

それじゃあ、また。

誰かの声がする

? 「おこー早く立てるー。」

顔が熱い

身体中が痛い

関節もギシギシする

? 「早く立てつてんだよー。」

ああ……また腹が痛くなつた

蹴られたみたいだ

早く立たないと……

でも身体が言つこと聞いてくれない

もうダメなんかな……

いや…………俺はまだいける

あ、また蹴られたみたいだ

マリーゴメン、約束守れな…………かつた

遂に奏の意識が飛んでしまったようだ

どうしていつなつたか順を追つてみよつ

学園に編入生として無事、入学して来た奏

この日の奏は授業ではなく学園の中をアリスの案内で見て回つた

しかし奏は新しい環境に興奮して教科室の名前など覚えてないが

その内に昼休みになり、

校内にある超高級レストランと言つてもいい学園の食堂でアリスと  
昼食をとつていた

少しすると三人組の男生徒がレストランもとい、食堂に入つて來た

周りが少しざわつくのが感じられる

その三人組の内の一人、リーダー的な男生徒がアリスに話し掛けてきた

背も秦より高く、体格も見た感じからすると少し鍛えてるようだった

三人は俗に言う不良のようだった

そのリーダー的な男生徒はアリスの手をとり、こんな男とじやなく  
昼飯と一緒にしようと言っている

アリスは嫌がり、掴まれている手を振り払おうとするがやはり男と  
女だと力で勝つのは男だ

そんなやつとりを目の前で見せられている秦は椅子から立ち上がり

男の手をアリスからばがした

わからん男はキレた

始めは口論だつたがやはり若き野子としては拳で語りねばならぬ  
のだらう

ところへと喧嘩になつた

引っ越しのバイトで少しは鍛えられている奏のガタイもあり体格的には奏と男はそこまで差はないが、決定的に違うものがあった

それは魔法

相手は「ひいの世界で育った純粹な魔法使い

一方奏は魔法が使えない

相手も不良っぽいといえど流石に魔法が使えない奏に、さらに食堂では魔法を撒き散らさないと考えていたがそうではなかつた

こちらの世界では魔法が使って当たり前

さらりこの学園は魔法使いの勉強の為の上層学園といって言つてもいいくらいの学園

そして何より奏が魔法を使えないということを誰も知るよしもなかつた

男が魔法を詠唱すると奏の身体は動かなくなつた

しかし顔は動くよつなので卑怯だ反則だなんだいろいろ叫んでいたと顔面に一発食らつた

それからほいわゆるリンチだった

ボコボコにされ、男がパチンと乾いた、小気味良い音を指で鳴らすと奏の動かない身体から魔法がとけ、倒れ込んだ

そしてそこからほんとうのよつに蹴られたり踏まれたりしていた

そして、意識が飛んでしまった訳だった

次に奏の意識が戻ったのは放課後になつてからだった

(なんだろう、なんか独特の香りがする…………)

「ここは保健室だった

(何かに包まれてる……ベッドかな?)

瞼を開きたいが重すぎて開く事ができない

(こつたいどのくらい時間が経ったんだから身體が痛い。  
瞼も開けない……)

少し経つと奏は瞼を開いた

(ここは……保健室……かな?)

真っ白なベッドに横たわっている奏

首を左へ向けるとソリヒに椅子に座っているマリーがいた

マリーは奏が寝ているベッドにもたれ掛かって寝ていた

(見舞いに来てそのまま寝付けたのかな…………?)

なんて模索していた奏だが、自分の事を考えて少しブルーになつて  
いた

(俺、弱いな…………こないだは魔法無しなのに俺一人じや勝てなかつたし……今回も魔法を使われなかつたとしても勝てたかわからなかつたし……マリーとの約束破りまくりだ…………)

案外奏は約束を律義に守るたちのようだ

「ガーデンさんに弟子入りしようかな…………」

ぽつりと漏りした独り言

声はすぐ部屋の壁に吸い込まれていった

(マコーの寝顔つてかわいいんだな…………いや、女の子なら誰でも  
もやうか)

一ヤニヤし始めた奏

マコーを起しますように上半身を起します

「……………ふう……………」

やはりまだ痛みは消えてないようだ

奏はマコーのまへを突き始めた

「…………」ハーむ。張り良し、肌良し、フード感じ

ぶつぶつこながりマリーのまつペを突いたり軽べつまんだりして  
いる

(…………何と云ひか…………マリマリしますなあ…………／＼)

一ヤ一ヤ腹食が激しく、やうに手つきがこせりして秦

リリは学園内です

(…………リのリーフー感…………たまんねえ／＼)

奏は想の世界へと旅立った

マ「あ、起きた?／／／

「ああ」

マ「奏、もお身体痛く…………ない?／／／

「ああ、もう大丈夫さハ一一。君の愛が僕の傷を癒してくれたのさ

」

マ「もおつー奏のばかあ…………次無茶したらちゅーしてあげないぞ  
つ／＼＼＼

「…………ああ…………そんな」と言つからまた身体が痛みだしたよ  
ちゅーしてくれたら治るかもしねないな…………

マ「さあ…………田、つぶつて…………？／＼／

(なーんてこ…………たまんねえたまんねえっ！／＼／)

妄想の旅から帰還した奏

今、奏の脳内は有頂天に達していた

マ「奏、いつまで触つてんのよ

フニフニ触り起きたマニー

しかし今、妄想の旅をしてくる奏にはマニーの声は届いていない

マ「奏くーん? いつまでやつてるのかなー?」

奏の田の前で手を振るが全く気づかない

今の奏の顔は形容しがたいニヤけ顔である

マ「こつまでまつてんの…………よー。」

パシーンと一発気持ちの良い音が部屋に響く

奏はレンタの衝撃でベッドから落ちた

「…………っ…………ぐ…………あ…………」

不意の出来事に声が出ないようだ

床の上でもがき苦しむ奏

マリーはまつたぐ、と言わんばかりのため息をついた

奏はしづらしく起き上がりなかつた

マリーはベッドから落ちたまま姿を見せない奏が心配になり奏の元へ駆け寄つた

奏は床の上に仰向けてぐつたりしていた

マ「奏！大丈夫つ！？」

流石にほっぺをいじられた仕返しにしては怪我人にはやり過ぎたかもしぬないと不安になるマリー

秦の肩に手を回し、上半身を起します

マ「秦……奏つーー。」

ひきこむ

マ「え……？」

秦の手はマリーの胸を捕らえていた

もみもみもみもみ

秦の掌の中でマリーのたわわに実った果実が次々に形を変えている

「仕返しつ

ニイツと奏の顔が緩む

「……………」  
「……………」

ドゴツ！ボグツ！メキヤツ！ゴギゴギツ！パシンパシンツ！

少しの時間、保健室から悲鳴と不可解な音が響き渡る

保健室の先生が悲鳴を聞き付け、マリーを止めたことで奏の死は免  
れた

「あらわし」

ベッドの上で声にならない声を漏らす奏

顔もかなり腫れていってイケメンの面影は消えていた

マ「次またやつたり今度」と上めを刺すわよ……

ギロッヒマニー睨まれ、ビクンッ！と身体を震わせる泰

（あ、漢なり……やうなきやいかなことがあるー。）

なんて言つてもまた殺されるだけなので心にしまつておへ奏であった

（まあ、めぢやくぢや氣持ちかったしいか……）

今日の収穫は身を危険に晒してまで手に入れた物だと言わんばかりの誇りしだ

がんばれ奏！お前ならまだまだけるー

「つかあこいつはどひなつた？」

マ「あこいつて？アリス？それともヴァン？」

「ヴァンってあの男のこと？」

マ「そう。あのあと大変だつたんだからねー、私が食堂こむりうど  
よく来たからよかつたものの」

「その、ヴァンは…………一体どひう奴なんだ？」

マ「そりね…………端的に説明するなら私のクラスメイト。で、学園  
内一のやんけや君。ってところかしら」

「俺の一上だったのか…………」

「最高よ。マリー、おつかれ。お出でにならね」

「…………アリスは大丈夫なのか？」

「ええ。私が寮まで送ったわ」

「何も無くなりました……」

「あなたのおかげよ。ありがとうございます、奏」

「いいしなさい。ヒーリング一つ聞きたこんだけだ」

首を傾げるマリー

「ガーデンさんってアリスの屋敷にいるのかな」

いきなりだつたので少し驚いたマリーだつたがすぐこの意味を察した

マ「今ちゅうじ寮のマリーの部屋にいるんじゃないから~」

「ん? ..... てことは執事とか召し使いさんつて学園内でも主人のお世話するの?」

マリーは首を横に振つた

マ「ガーテンさんは特殊なのよ。アリスの家の執事でもあるナビ、この学園で教鞭もとつているの」

「ほーほー。なら急がなくとも大丈夫か?」

マ「強くなりたい気持ちはわかるけど今は身体を休めなさい。明日授業受けれる?」

「でたこのはやまやまなんだけ身体が…………」

マ「なら私が伝えとくわ。寮には戻らないで今日まじめに寝なさい」

「あ、ああ…………」

マ「じゃあ私は用事があるから戻るわ。先生、よろしくお願ひします」

仕事中の先生にお辞儀をして保健室から出て行ったマリー

「今日はもう寝よつ…………」

満月が映える漆黒の夜空

窓から流れてくる涼しい風

「ん…………」

風に撫でられ目覚めた泰

「ふあ…………夜…………か…………」

ベッドから下り大きな伸びを一つ

「あ……………痛み……………」

まだ体に痛みがかなり残っているようだ

「暇……………だな……………」

保健室には奏一人

「少し探索でもすつかあ……………」

保健室の扉を開け、廊下へ出た

「つおつ、綺麗……………」

窓から差し込んでくる月の光は廊下を幻想的な景色にしていた

少し歩くと薄い、ぼんやりとした灯がついた

「おっ……流石魔法学園」

階段を上り夜の景色を一望するために屋上へ行つた奏

屋上へ着くと一つ人影があつた

(あれ……先生かな?)

少し目を凝らすと生徒である事がわかつた

奏は夜空を見ながらさりげなくその人影に近づいた

? 「…………誰」

「いやあ、夜空が綺麗なもので見に来たんだ」

生徒は女の子であった

身長はアリスくらいの小柄で髪は肩につくくらいのやうな長い茶色の毛

(「の、学年同じかな?」)

尋ねてみたが返事は返つて来なかつた

会話も無く、しばらくの間夜空を見つめる一人

奏は「ロロンと仰向けになり目をつむつて冷たい、

流れる風の感触を楽しんでいた

? 「近いつけ貴方に厄災があるわ。『氣をつけなさい』

そう言い残し彼女は屋上から立ち去った

(.....?)

それから少し屋上にいたが寒くなってきたから秦も屋上をあとじた

「あんまし動き回のも今の体には良くないし寝るか

保健室に戻り、階段を下りて走る途中、明かりの灯っている教室  
が一つあった

教室といつてもどれもが講堂のよつたものなのだが

「お…………さつきの人かな」

その教室に行く途中、奇妙なモノを奏は見た

「あ、あれは…………つー?」

他の教室の黒板の前で首吊りした生徒を見つけたのだった

(マママママママママジかよつー?)

恐怖を覚えた奏はひとまず明かりのついている教室に行ってさつきの彼女に先生を呼んで来てもらつこととした

しかし明かりのついた教室には誰も居なかつた

(あれ、誰も居ないのか……でもなんか机の上に置いてある)

こんな事をしている暇は無いことはわかつていたが何故か吸い込まれるように教室に足を踏み入れ、その何かを確かめに行つた瞬間一つしかない教室の扉が閉まつた

(えつ…………ー?)

いきなり扉が閉まつたことに驚きながら扉が開くか確かめた

「開かない…………」

かなり焦り始めた奏

(わざわざの首吊つといい、この扉といい一体何が起つていいんだ)

何かを確認するため近づく

(これはメモ用紙と袋?)

そこにあつたのは何かが書かれたメモ用紙と何かが入った口の縛られた黒い袋だった

まずメモ用紙を読み始めた奏

(…………よ、読めない)

そう、奏は「」から世界の字が読めないのである

(マズイπ。マズイππ。…………)

恐らくメモ用紙には呪われた生徒の言葉なり攻略のヒントなりが書いてあるはずなのだが読めない奏にはただ古代文字が書いてあるだけにしか見えない

(ビービーハーフ…………そつだ、この袋にヒントがつ)

黒い袋の紐を解き中を覗いた

「うわああああああああああ%#£

=#&\* @§

\$¥

「……」

中に入っていたのは生クリームならぬ生首だった

生首を見て恐怖の底に墮ちた秦は教室の扉に急いで駆け寄り開ける

「へへへ…………開けっ…………開けよおつーー！」

しかしながら先程確認した時と同じで扉は魔法をかけられたようごびくともしなかった

「はあ…………やがて…………生クリームと一緒にすなん  
て嫌だせ俺…………」

かなりパニックになっている秦

「じつしたものか…………うちの世界の文字読めないしよ…………」

なんで言葉は話せて文字読めないんだよとか、マリーに教えてもらひうかとかいろいろと呟いている奏

? (文字が読めない…………?)

「…………シ……」

(今…………視線のようなものを感じた…………)

教室の中をぐるーっと見回すが誰も居ない

(脱出の手掛かりを少し調べてみよう……)

するといきなり明かりが消え、ガタガタッと大きな音がした

(…………マジでなんなんだよシ――)

明かりはすぐに戻つた

奏はまず黒板周辺を探索し始めた

(にしても縦にも横にも広い教室だと…………)

大学の講堂のように教師の立つ位置からどんどん奥の方が高くなっている

「…………ん?」

奏は黒板の隅に何か書かれてあるのに気づいた

「…………よ、読めない」

奏はまた絶望した

(これ読めたとしたらホントは「今日の犠牲者。奏」とか「死ね！」とか書いてあるんだろうな……)

「…………やまつ」(この世界だとこうこう不便になるなあ

? ) (この世界…………! ?)

「…………誰だ」(ツ

また視線を感じた奏

何故か鋭い

(「うちの方から感じた気がする」)

窓側の方へ歩み寄る

柱。窓。カーテン。灯。何等おかしいといひは無いが奏はある」と  
に気づいた

(「あそこのかーテン…………もう一つしてある…………」)

見つけたそのカーテンに静かに且ゆつくり歩み寄る

そしてカーテンに手をかけようと近づくと、カーテンがビクッと微

かに動いた

(「…………もし、これが罠だつたらどうしようか…………完全に  
打つ手無しになる…………ここは慎重にこいつ…………）

「も、もしもし。もしかして、あの、生首さんの身体の方ですか…

…………？」

少し間があり、返事代わりにだろうかガタガタッと大きな音が鳴り、  
明かりがまた消えた

「――――ツ――――――――」

声に成らない悲鳴

カーテンから田を離れず後退りする奏

完全にビビりまくつてる奏であつた

ウゴクナ

そう一声かかると、後退りを止め、まるで壊れかけのロボットのように首を生首の方へゆっくり向ける奏

なんと奏の視界には、ぼんやりとした明かりに包まれ畠を浮く生首が映しだされていた

タスケテ..... クレ..... ピ..... ナア..... ウラマリ.....

「う、怨みを俺が晴らせば良いのか……………つ？」

オマエヲコロシテヤル！！

「うわああああああああああああああ」

と、同時に奏の肩に何かが触れた

「ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ツ」

? 「ばあ、驚いたつ?」

かなりの萌え声に呼びかけられ、振り向くとそこには女生徒がいた

思考回路がやられた奏はその場に硬直してしまった

? 「おーいっ。もしもおーし?」

「その後

? 「あははっ、ゴメンね奏君」

「まつたく…………か・な・り悪ふざけが過ぎてるよつー」

? 「へへへつ」

「はあ……」

(どうやらこの事件の犯人はこの女生徒のようだ。彼女は魔法を使つた悪戯が好きで、よく今回のよつた悪戯をやつているらしい。ちなみに生首はりんぐに幻覚魔法をかけてたとのこと)

「…………悪戯するのもいいけどあまり度が過ぎたらダメだぞ?」

? 「はあ~い」

(ちなみに彼女の名前はルナリア。同学年で、皆からはルーとかルーチャンとかるんるんって呼ばれているらしい。要出典)。  
(い)

「そいやルナリア」

ル「なあに？ 怒るのはダメだよお？」

「あの教室に首吊り生徒仕掛けたのもルナリアか？」

ル「え？ 私そんなことしてないよお？」

「え…………？」

ル「だつて今日この教室以外は私使つてないよ？ 扉の近くに教室に入るようにする魔法かけといたし、扉開かなくしたのも私だし……」

「ちょっとルナリアもついて来いッ！」

ル「え？え？なに？ま、待つてよお～」

急いで教室から出して首吊り生徒のいた教室へ走る奏

（あの首吊り生徒がルナリアの罷じやないとしたら……まさか  
！）

教室の前にいた奏

（な、ない…………首吊り生徒がいない…………）

ル「はあはあ、どもしたの～奏？」

遅れてやっと来たルナリア

「いや、やつは前に首吊り生徒が居たのを見たんだ……」

ル「え？誰もいないよ、奏？」

奏は血の気が引くのを感じた

この学園には七不思議があるとかないとか

もしかしたらその一つが首吊り生徒なのかも知れない……

「あ、まあまつてくれ…」

今、たくさんの女子に囲まれています

普段なら狂喜の沙汰なんですが今日は違います。助けて下さい

女「変態！スケベ！びくせのぞきに来たんでしょ…言い訳なんか聞きたくないわ！ねえみんな…」

「うそうそ」と女生徒達は額を、ついに罵声が飛び交う

ちなみに今、両手両足縛られています。ＳＭプレイがお好みなんでしょうか

なんでガーデンさんに会つたために女子寮に来たのにいつなったんだ

しかも女子寮入口の石の床の上に素足正座とかまだ怪我人の俺にはキツイです

しかも何気にヴァンもいるし

あの野郎、アリスに逢いに来たのか……

女子のほとんどはいま俺の元に集合している

それをいいことにヴァンが俺の方を見てニヤリと笑みを浮かべ、窓から静かに女子寮へ入つて行つた

あの勝ち誇ったよつた顔が頭から離れない

しかしその顔をまたすぐに見ることになった

ヴァンが侵入して一分したあたりに女子寮の中から悲鳴が響き渡った

もちろん俺の元にいる女生徒がすぐに悲鳴の元へ向かう

しかもただの女生徒じゃ ない

見るからに強そうな顔の重（獸）戦士数人の少數精銳だ

正直な話、彼女達に迫られたらヒイイイイイイッビンハジマニ  
だろう

何とも恐ろしい戦乙女だ

その「ひの靈」を味方にしてもやつてしまつた

まあ予想通りとこいつか何と言つか、ヴァンが引寄せられて連れて来られた

ヴ「……………腕がもげる、う、ううう……」

苦痛に顔が歪んでいる

戦乙女達が奏と囁じよひ、「ヴァンの腕と足を縄で縛り上げる

そして裸足にさせ、奏の隣に正座をした

裸足にあるのは拷問のポリシーらしい

「オ、オイッ！俺こりんなことしてただで済むと思つてんのかつ！？」

戦乙女達がズイツと前にでるとヴァンはショボンとなつてしまつた

（つていうか、ヴァンってこんなキャラだったのか…………人  
は見た目じゃ判断できないな）

ヴァンのキャラに少し驚いた奏

女「さて、なんで私達の寮に来たのか聞かせてもらおうかしら？」

ヴァンは女生徒達を脳にストックされている壊め言葉の限りを広げ  
しておだてている

女「あんたはなんで女子寮に来たのよつー！」

女生徒達は奏の方へ視線を向けた

「俺はガーデンさんに会いに来たんだ。だけど女子寮の前にいた女子に話しかけたら悲鳴上げられてね。理不尽にもこうなったわけなんだ」

女「ガーデンさんに会いに来たってホントかしら……ホントは覗きに来たんじゃないのかしら」

女生徒達は「」を話をし始めた

「あ、ちよ、おい、ホントだつて！」

ヴァンにいたつては存在 자체スルーされていた

向こうからアリスが歩いてきた

ア「あれ？女子寮の前に人だかり……？」

アリスは人だかりが気になり見に来たが、そこに見覚えのある顔が二つあつた

ア「か、奏どうしたの！？」

ヴ「アリスッ俺の事は！？」

「お、アリス！助かつたあー」

女「エリス、ホントみたいね」

奏は解放されアリスの元へ

「アリス、助かったよお～」

ア「ちよ、ちよっとそんな近づかないでよつ……もお」

ヴ「ア、アリス……俺は……？」

ア「あのね…………氣安ぐ気前で呼ばないでよ。氣色悪いつ」

ヴ「え…………」

女「…………」「イツは確實に処刑ね」

奏はアリスについて行き女子寮のアリスの部屋へ

(ヴァンが囮まれてる……………「愁傷様です」)

## ヴァンの方へ手を合わせる奏

ア「奏ー？早く来なさいよ」

「ああ、悪こ悪こ」

# アリスの部屋に入つた一人

(うわっ……整つてんなー)

奏のいい通りとても部屋の中は整っていた

「つか、男を部屋に入れるのに抵抗無いのな」

ア「え? だつて..... 奏なんて男として見る必要無いし...」

「せつげなく酷い事言つたのなお前.....」

ア「で..... 女子寮に来たつて事は私に用があるんでしょ?..」

「いや、俺が用があるのはガーデンさんなんだ」

ア「ああそつ..... つて、なら女子寮じゃなくて直接ガーデンに会  
いに行けばよかつたじやない」

「いや、 そなたがガーテンさんがどうに障るかわからんないじゃ。  
アリスに会えばわかるかなーって」

ア「なるほどね。まあその内ガーテンが訪ねてくるはずよ」

「毎日訪ねてくるのか?」

ア「まあ教師としての時間が終われば私の執事だしね」

「だしそうだな。まあしばらくお世話になるわ」

ア「え? それってどういってんの?」

「ハハハ」

ドアがノックされ声が聞こえてきた

ガ「入つてもよろしいですか。お嬢様」

ア「いいわ、入りなさい」

扉を開け一つ礼をしてガーデンが入ってきた

ガ「お嬢様、今日もお疲れ様でした。今日は奏君も『一緒に締めますね』

「どうも、ガーデンさん」

ガーデンに一礼する奏

ガ「して、奏君。私に用がありそうですね」

ガーデンは奏の言いたい事を既に察知していたようだつた

こんにちは。奏です

さて、今は授業中

しかし俺は瞼も頭も体も動かないんですよ

というのも、ガーデンさんに特訓の申し出をしてめちゃくちゃシゴかれて体中の筋繊維がズタボロに切れまくり、あーんδ ヤイアンにやられた後ののび みたいに癒だらけ

しかも特訓とは銘打つていいものの内容はアツアツのカレーを頭から被つても平気になれるんじゃないかつてくらいの熱いースポ根トレーニング

もう少しこんな意味不明な事しか考えられないくらい眠いです

で、今の授業なんですが

外で遊びましょうってどこの幼稚園だよッ！――！

『自然に触れ草木や動物、命の流れを感じ取りなさい』

つていうことらしい

皆好き勝手に遊んでいるだけにしか見えないのは俺だけなのでしょうか？

まあそんな俺も草の上に寝転んで寝てますが

ア「体大丈夫？」

ル「かーなーでーくーん」

視界が暗くなつたから田を開けるとそこにはアリスとルナリアがいた

「体はボロボロ、最高に眠いよ」

奏は上半身を起こし三人で座つて話し始めた

(美少女一人と仲良くお話ですよ。元居た世界じゃ考えらんない体験だぜ)

するとそこに一人お客様がいらっしゃった。それは教師のマグエルだつた

マ「やあ。少し私もお邪魔してもいいかな?」

三人に一コツと優しい笑顔をその顔で作つてみせた。マグエルは若く、いかにも温厚で誰にでも好かれそうな人柄を感じさせる人だ

ル「マグちゃん一人入りまーす」

「なんだそのドンペリ入ります みたいな口調は」

ア「ドンペリ?」

「あ、いや何でもない何でもない」

「ね、ね、そう聞かれる気になりますね」

笑顔のマグエルは眼鏡をくじつと上げながら奏を追撃してきた

（マズイ<sup>三</sup>。マズイ<sup>三</sup>コ<sup>二</sup>ン。俺の方の世界の事は話しゃダメ  
つてマリーに言われてるじ……）

「や、それはだな……」

その後とめどない三人からの追尾<sup>ミサイル</sup>をなんとか振り切ったわけだが、

ルナリアが核のスイッチを持ち出した

ル「そおいえばねー、こないだ奏をおじかしたんだけじねー

ア「まだ悪戯なんてやつてたの?」

ル「奏くん、字が……」

「う、あ、あ、あ、つ！…ダメダメ！…」

（これ以上俺の世界に関係ありそつなこと突つ込まれたら終わりだ  
つ…！）

奏はルナリアの口を塞いだと手をもひでいつた時急に動いたからか  
体勢を崩した

「のわっ！…」

ル「きやっ！…」

奏はルナリアに倒れ込まなによつて腕を突き出した

ア「あ…………」

マ「おやおや」

その体勢は奏がルナリアを押し倒した体勢になつていた

ル「奏くん……脅威なのに大胆だね…………」

ルナリアは顔を紅くしている

「な、ななななななに誤解されるようなこと言つてるんだよルナリア！…」

マ「うううううう奏君。大好きで誰にもとられたくないからって皆の前で見せ付けるのはよくないですねぇ」

「せ、先生え！…」

茶化すマグエルの冗談を返しながら急いで体勢を直す奏

ア「…………」

違和感に気づいた奏

ア「いわやつくならあそここの森行きなすことよ」

(…………怖い怖い！…目が笑つてない！…)

ル「あはっ、冗談だよおー」

マ「なかなか面白かったですよ。一人とも」

「せ、先生えー！」

マ「はははっ。さて、今アリス君が『森』と言つたね。少し行ってみようか」

ア「他の生徒はどうするんですか?」

マ「なーにーの年頃だ。自由に遊んでるほうが楽しいでしょー」

（わかつて放置してたのか……）

マグエルは生徒達に『森に行つてきます。私がいなくてもしつかりとこの自然を感じなさい。』と言い残し、奏達と森へ入つて行つた

森の中はとても幻想的な世界だった

木々の間を抜けて差し込んでくる日の光はとても綺麗で自然の暖かさを感じさせる

マグエルの後をついて行き、

森の中のいろいろな場所を見て回った

マ「さて、ここからは自由行動です。

探索し終わったらまたここに集まつてください。私はこの切り株の上で読書して待っていますから」

ル「私はくたびれちゃつたから先生と一緒に居るねー

「へ」とせ.....

ア「奏と一緒に行動?」

ル「いつてらっしゃい」

ルナリアはただ『いつてらっしゃい』としか言わなかつた

(意味深だ……全く……)

「どうすんだ、アリス」

ア「まあ私を護衛する人間と一緒に行動することも必要よね」

「護衛ねえ……」

(学園の中ではガーデンさんは教師。教師としてはアリスを特別扱いはできないからな……)

ア「行きましょ、奏」一人はしばらく歩き、止まつた

ア「少し疲れたわ。休憩しましょ」

アリスはその場に座り込んだ

「喉渴いたな」

ア「そうね。でも、」の辺に水気は感じられないわね？」

（ん？なんか聞こえる…………）

「アリス、水の魔法は使えないのか？」

ア「生憎私金づちだからか水の魔法と相性悪いのよ」

（またなんか聞こえる…………）

「なるほど。ちょっとこの辺に飲み水が無いか見てくる」

ア「あら、ありがと。じゃあ待ってるわ」

奏は何かが聞こえてくる方へ歩いて行く

そのうちアリスの視界から奏の姿は見えなくなった

ア「…………あいつなんかこっちの人間と雰囲気違う感じがするのよね…………」

「…………」導かれるように森の中を進んで行く奏

「…………あつた！！」

森の木々が開け、そこには小さな湖があった

…………キナ…………サ…………イ…………

「あ、今なんか聞こえた…………」

「…………キナサ……イ…………」

「はははっ、来いつてか…………」

奏は聞こえてくるがまま湖の前まで歩み寄る

「…………冷てつ、水に触れるといんやりと冷たかった

「…………しかしながら呼び出されたんだろ?」

すると湖の中から髪の長い龍が現れた

「…………あ…………」

奏はいきなりあらわれたこの龍の存在に恐怖し動けなくなっていた

『…………ミク来タ…………異世界ノ人間ミ…………』

「…………あ…………しゃ、喋った…………」

龍は首を伸ばし奏の元へ近づいた。一方奏は龍が喋ったことに驚い

ている

「…………な、何の用なんだ?」

『…………奏、才前ガ来タコトハ……トテモ嬉シイ』

「あ、はあ……どうも……」

『…………ノノ姿テハ……話シニクイヨウダナ…………』

龍の体が一瞬光り、次奏が見た時龍は人になり、湖の上を浮いていた

「おお…………で、俺に何の用なんですか?」

『私モニの姿でいられる時間は少ない。奏、お前は魔法が使えない  
な』

奏は一つ頷き、肯定する

『お前に力を与えるのが私の役目。まあ受け取れ』

龍人は右手をかざし、奏の胸に突き刺した

「ぐッ…………ツ…………グアッ…………」

『力は大事な人を護る為に使うのだ』

「あ…………あ…………」

奏はそのまま意識が消えてしまった

? 「…………なで…………で…………奏…………奏!」 ハッと田を醒  
ました奏

ア「全く、何でこいつなど木によつ掛かつて寝てるのよつ」

「あ、ああ……」

ア「ああじやないわよバカ！ほら、先生のところに戻るわよー。」

奏は立ち上がりアリスについて行く

ル「あ！おかえり～」

ア「ただいま。先生、ルナリア」

マ「お帰りなさい。一人の冒険はビックリでした？」

パタンと本を閉じアリスを見上げマグエル

ア「最悪よ。まったく……」

マ「おやおや、奏君はどうやらアリス君を怒らしてしまったようですね。さて皆さん、帰りますか」

ル「はい～」

( 一体…………あの出来事は何だつたんだろうか………… )

奏はガーデンとの特訓のあと、大浴場に入る時胸元を見ると一つ傷跡があつたそくな

チャイムの音とともに今日の授業が終わった。さて、なんと明日は休みなのであります！

（休みの日は特訓が無い。こっちの世界の物とか景色とか見たいし、明日は街にでも繰り出でつかなー）

久々の休日でうきうき気分の奏である

自分の部屋に戻るべく教室から出ようとすると、奏の日にある光景が？「アリス。明日は休みだね……どうだい？」の僕と一日共にするつていつのま

ア「え、ああ、その、ね」

めんどくさそうに対応しているアリス

（認めたくは無いがアリスはかなりモテるんだよな……周りにもつとかわいい人いるだろ？）

今日アリスにデートのお誘いをしてるのは、奏の前に座っているハーレイだった

ハーレイは超絶イケメン。本来なら誰もが羨むその美貌でモテモテ

のはずなのだが、あまりそうでもない。第一印象はかなり高いがその後関わりを持つ中でその美貌からのイメージと中身とのギャップがある。かなりフレンドリーで自身の美貌を鼻にかけないし結構話が合ひつと、数少ない友達でなかなかのナイスガイってところだ

(……今日の口説き相手はアリスか。まったく、頑張るねえ)

ハ「美味しいパフェを出してくれるとこ、僕知ってるんだ。どうだい、甘い甘いパフェで僕と優雅な一時を……」

ア「『めんなさい』。私甘いもの苦手なの」

(優雅な一時でパフェつて……やつぱアホだ)

アリスはそそくさ教室から出て行つた。ハーレイが向こうから歩み寄り彼の席にドスンと座り、田の前の定位置に戻ってきた

ハ「ハア、今日もダメだったよ！」

「気にすんなよ。あいつ、異性になんて興味無いんだろ。毎度毎度よくやるよな、そんなことしないでクールにしてれば見てくれだけは完璧なのにな」

ハ見てくれだけつてのは余計だよ、奏

手を掲げ、自分に漫るシート

「ははっ、こないだはナルシスト全開で挑んでたよな。ありやあ確実に引かれてたぞ！」そんな他愛もない会話をしているところに訪

問者が

ア「あのねえ、じつはこのー。」

アリスと

ヴ「そんなこと言わずにさ、俺とや、畠口や、データシートせせりかわー。」

ヴァンだった

(わざわざのクラスまで来たのかコイツ……御苦労なこった)

「どうした、ハーレイ？」

ハーレイは秦の肩をとんとんと叩いて注意を引いた

ハ「ヴァンちゃんとアリスのこと好きなのか？」

ハーレイはぼそぼそと小声で尋ねてきた

「どうなんかねアイツ」

低い調子でふーんと鼻を鳴らすハーレイを横に頬杖ついてアリスと  
ヴァンのやり取りを見ている秦

(なんでアリスは教室に戻ってきたんだ、女子寮行けば男は入りづ  
らっこだ)

奏は後に女子寮が男がただ入りづらいだけでといった甘い認識を変え、恐ろしさを知ることになる

ア「あのねえ、私にも予定つてもんがあるのー。」

ヴ「予定つてなんだいアリス？」

ア「う、…………その…………」

回避の為の咄嗟の嘘に質問され嫌な汗を確認したアリス。その眼は宙を右往左往と泳いでいる

ヴ「なんだ、人に言えないような用事なのか。まさか…………予定なんて嘘か？」

ア「そ、そそそそんなことないわよつー明日は……か、奏においしいもの食べさせてもらひつー！ー！」

ヴ&a mp;&a mp;シ&a mp;奏「「「は？」」「

自分を名指しの唐突な嘘に頬杖していたひじをずつと滑らせた奏

ア「お、おいしいバフュとか、洋服みたりするのつー。」

ハ「おいおい、ちいさこじもの苦手つていってなかつたか？」

先程否定されたハーレイの誘い文句をアリスは奏にOKサインを出している。そのことにツッコミを入れるハーレイだった

ア「だから予定があるわけよ、ヴァン、わかつた？」

ハ「スルーかよー」

ア「ほら、行おましょ奏ー」

ぐぐいっと手を引つ張られ教室から消えて行く奏とアリス  
ヴ「アリスが…………アリスが…………俺の名前を…………呼んで…………ヴァンだつて…………」

ヴァンはアリスに名前を呼ばれた事に一矢つけまくつて、浮足立つて教室からふらふら消えていった

ハ「まつたく…………」

一方奏とアリスは廊下を歩いていた

「なあ、なんであんな嘘ついたんだよ」

ア「あれを乗り切るにはああやつて嘘つくしかなかつたじゃないー」

「しかしまずこぞコレは…………」

ア「なにがよ?」

アリスはまことに言われたことを疑問に思い、奏に尋ねた

「…………恐らくハーレイとヴァンが確かめにくるだろ?」

ア「確かめるって何を?」

「お前がさつを語ったことをだよ」

ア「つまり、奏と明日デートするって嘘を?」

「恐ろくな。もし一人で街を歩いてみる、たぶんハーレイとビアンが来てまた口説き始めるぞ」

ア「え、それはちょっと…………でも明日買いたいものがあるのよね」  
二人は再び廊下を歩き始めた

「ガーデンさんはどうなんだ?」

ア「明日は教師の会議があるみたいなの」

「ならマリー誘うとか」

ア「そうね。でもそしたらあいつらが…………」

「美女と美少女の女二人だけ。絶対口説きに来るな」

ア「もう、いいから奏も来てよ!」

「…………パフェは奢らんぞ?」

ア「やつた! 来てくれるのね!」  
「今回はまあ仕方ないからな」

ア「じゃあマリー誘いに行きましょ!」

二人はそのままマリーのクラスへ向かった

ア「マリー、いるー？」呼びかけたが返事は無い。つまり教室にマリーはいなかつた

すると、そこにいた先輩女生徒がマリーは今日欠席していることを教えてくれた

ア「休みか……奏、寮へ見に行きましょう」

ア「マリー、入るわよ？」

ノックしても呼びかけても返事は無く、仕方なくアリスはドアノブに手をかけた

ガツ、ガツ

「鍵かかってるみたいだな。さてはマリーのやつ、サボりか」

ア「…………仕方ないけど明日は奏と二人か」

それを聞いた奏は少しムツとしたが何も言わなかつた

ア「じゃ、また明日ね」

アリスはそのまま自分の部屋へ帰つて行つた

奏はいつ頃出かけるのか聞き忘れたことに気づいたが、聞きに行く  
のもめんどくさいので奏も部屋に帰つた

## Date、伊達、デート？

夕焼け。空一面が、見とれてしまうような夕焼け

海が見える。ここは街の中の海に近い公園

ア「…………今日は付き合ってくれてありがとうございます」「…………  
楽しかった！」

初めて見るアリスの満面の笑み。それはそれはとても可愛いものだ  
つた  
いやホントに

ア「その…………今日私を楽しませてくれた奏にお礼、したいなっ」「

アリスは顔を夕焼けに負けないくらい紅らめ、俯き上目遣いで奏を  
じっと見つめる

それも後ろで手を組み、体をもじもじさせながら

〔…………で…………なで〕

..... 鳴呼、抱きしめたくなるじやないか「トイツめ。愛おしい。  
実に愛おしき也。今日のアリスはおかしくらじめちやくちや可憐い

ア「その…………目、閉じて…………」

……嗚呼、閉じるのは僕の理性でもいいですね？抱きしめて  
もいいですね？もう我慢しなくてもいいですね？この可愛い過  
ぎるアリスが悪いっ！小悪魔め！口リ口リめ！ツンデレめ！

一方アリスは目を閉じて唇を軽くだしている

! !

奏の中の何かが切れた。それは恐らく、歯止めとなっていた理性と  
奏を繋ぐ糸

【 なで か で 】

奏も目を閉じ、アリスに抱き着いた。その瞬間、奏の体に殴られた  
ような強い衝撃が走った

ア「なにすんのよーー！」

そんな怒声が耳をつさざへ。そして奏が皿をあけると

ア「…………ハア…………ハア…………ツーーー！」

顔を真っ赤にして怒りの鉄拳を自分の腹に打ち落としていることがわかつた。

何をされたかわかつたところで、稻妻のように激痛が走る

「…………～ツーーー！」

痛い。かなり痛い。それこそ長いくだりで皿饅のネタをやつて、滑つてしまつたあの空氣並に

ア「あんたつて奴は…………起きて来ないから起こしに来てあげたのにーいきなり！抱き着くなんて！バッカじやないのつーーー！」

「ん~？夢ならしいじゃあーん……アリストーーー！」

殴られてもまだ寝ぼけてる奏はアリスを自分の元へグイッと引き寄せた

ア「わつ…………な、何すんのよ…………」

抱き着きの次は抱き寄せられて、男免疫の無いアリスは照れの頂点。しかも次はチューしようとしてるではないか！

パニクリ過ぎたアリスは、とりあえず殴った。殴りまくった。力の限り殴りまくった。ええ、そりやもちろん奏の顔面を

ア「なななななな何しようとしてんのよつ……」、これは正当防衛だからね……」

(…………やうか…………これは夢じゃないのか…………)

やつと眠気が消えた奏は上半身を起こし、頭を搔きながら大きな欠伸をしている

ア「は、早く仕度しなさい……もお何されるかわからないから外にいるわねっ……」

バタンッ！と、大きな音を立て嵐は部屋から過ぎ去った

.....

ア「今度あんなことしたらただじゃ済まないわよ？」

もう十分殴られましたと言いたげな顔の奏。今は一人で街を歩いて  
いる

「ところでアリス。欲しいものってなんなんだ？」

ア「それはまだ秘密よつ

一体何だろうと思いつつも深く聞くのもめんどくせこので止めてお  
いた奏であった

それから少し歩いたところにあつた喫茶店にアリスが寄りたいと言  
い出したので立ち寄った

ちなみに奏の金は屋敷にいる時にマリーから多少もらつていたもの

である

ア「奏、外のテーブルに座りたいんだけどいい?」

断る理由も無いのでもちろんと言つて外のテーブルの、アリスが座る椅子を引いた

ア「あら、案外気が利くのね」

「その辺は俺だってわきまえてるよ」

アリスはぐすっと微笑んだ

「なんだよ、笑うことは無いだろ」

アリスは紅茶を注文し、少しすると紅茶が運ばれてきた。外テーブルに居ても、とてもいい香りが鼻まで漂つてくる。後日談だとこの喫茶店は味にも外見にも評判のある結構有名なところらしい

奏は辺りに建て並ぶ店を物珍しく見ると一つ気になる店を見つけた

「なあアリス、後であそここの店行ってみてもいいか？」

ア「後じやなくて次でいいわ。どんな店気になつたの？」

奏が指差す先にあつた店、それは古びた骨董屋のよつだつた。

アリスが紅茶を飲み終え、喫茶店を出てすぐ骨董屋に向かつた

ア「ふ~ん。奏つてこいつのこいつ興味あるのね」

「何て言つか…………惹かれるんだよな。たぶん俺だけじゃなくて男ならそうだと思つぞ?」ア「そつなかしら?どこかの御曹子とかお偉方と出かけたときはお菓子や紅茶を深く味わつたり、馬を嗜んだり、湖の周りを散歩したり、ドレスや魔法石買つてくれたりとかだつたわ」

(魔法石とか次元が違ひ過ぎる…………)

そんな奏は骨董屋の前で店をまじまじと観察してみた。外見はただの古びた骨董屋だったが、奏には何か感じたものがあるらしく目を輝かせている

ア（古臭い物に興味持つなんて奏つてやつぱり不思議な人ね）

外見から既に楽しんだ奏はつきつきしながら店の中へ入つていった

「……………おおーーー！」

つい声がでてしまつた奏。骨董屋の中はとにかく狭しと言わんばかりにもので溢れていた

ア「うー、店の外見のわりには案外品数が多いのね」

?「うん、んな店で悪かつたわね」

店の何処からか声が聞こえてきた。声からすると若い女という感じだ

ア「失礼。店の主かしら？」

?「そつよー。逆にあなたは密でいいのかしら？」

奏はいつの間にか店の奥へ行つてしまつていた

ア「ええ。できれば姿見せてくれると有り難いんだけど」

すると後ろから肩を叩かれ、アリスが振り向くとそこにはローブを着た人が立っていた

? 「いらっしゃい。私は店主のククリよー」

そう言いローブのフードを脱ぐとそこには、ピンク色の緩い巻き髪の、顔は女性というよりは女の子の感じがする店主だった

ク「こんな接客でゴメンねー。」こんな店やってるから冷やかしも多いのよ。でも女の子がお客さんなんて久々で嬉しいなー！」

ア「私はアリス。よろしくね。あ、客は私じゃなくて連れがいるんですけど、そっちなのよ」

アリスが奏の名を呼ぶと返事と共に店の奥から奏が現れた

「何があつたのかー、アリス?…………ってその人だれ

ア「ここ」の店主の……

ク「ククリよ。お密せん、なんか氣に入ったのあつた?」

「ああどりむ。ちよつと待つてくれ」奏はまた店の奥に消えて行つた

ク「あれ、アリスの彼氏なの?」

ア「ちよ、ちよつと!なんでやうなるのよつ」

ク「勘」

ア「奏が彼氏なんて……」

奏が彼氏だったらどうなるか想像したのかアリスは首をふるふる振つている

ク「その調子じゃ、まんざらでもなさうね。アリス」

ア「ちよつとあなたね~!」

ク「ふふつ、冗談[冗談つ]

アリスはククリを睨み、ぷくーっと頬を膨らませ唸つてゐる。美少女にやらせるとなんでもかわいい仕草だ

「あ、おーいーこれこれー！」

ガシャガシャ音をたてながら奏が持つて来た物、それは箒手だつた。しかも美しい彫刻が全体に彫つてあり錆やら傷やらでボロボロになつてゐるが、何かを感じさせる代物である

ア「奏、これボロボロじゃない」

「たしかにボロボロはボロボロなんだが、何かを感じる…………」

ク（ふーん……なるほどね）

ク「お密さん、それは挨拶の印にただであげるよ」

「ホントかっ！？」

ククリは頷き、そんなボロで良いならねと付け足した。まつたく、太つ腹な店主だ

ア「なんか悪いわね、奏の為に」

ク「んつ。これからも御贔屓になアリス、奏」

そして奏とアリスはククリに礼をして、店から出て行つた

ク「やつと、現れたよ…………」

ア「…………じゃ、今度は私に付き合つてね

」

「もつちろんー」

奏とアリスはゆっくり歩きだした

「そろそろ何買つか言つてもいいだろ?」

ア「そうね。実はパンを頼んでたのよ」

「パン?」

「ええ。知る人ぞ知るつていう一部にすごい人気の美味しいパンを予約してたのよ」

ふんふんと頭を頷かせる奏。アリスが買う物がパンだと言つことが意外だつたらしくなかなかの興味を示している

ア「で、そこのパンはね……」

アリスはパンについて語り始めた。普通なら適当に相槌を打つて聞き流すが、奏自身パンが好きなのでアリスの話に耳を傾けている

ア「あ、あそこよ。奏」

アリスの指差す先には確かにパン屋らしき建物があった。行列は無いもののなかなか客が出入りしている。知る人ぞ知るというより、普通に人気のあるパン屋といったところだった

アリスはパン屋に入り、奏は他の客の邪魔になるのが嫌といふことで店の前に待つことに

パンを買つだけにしてはなかなか遅いので、奏が店の中へ顔を覗かせるとアリスは店の人と客と話していた

(あいつめ…………待ってる俺の存在忘れてるな…………)

ア「ゴメンゴメン、話がついつい長くなっちゃって」

「…………つたぐ、こんなの今回だけだぞ」

あれから一時間以上待たされた奏であった。今二人がいる場所は海に近い公園。そしてその公園のベンチに並んで座っている

ア「ドメンね。でも…………… 今日は楽しかったー。」

アリスはベンチにパンを置いて、奏に向かい合いつぶつにして立ち上がりた

アリスは後ろで手を組み、座っている奏を見つめる

ア「今日一 日付合ひてくれてありがとう。繰り返すけど、す、るく……  
……………楽しかった！」

(あれ?なんか見たことあるよ?な……………)

ア「奏の事少し知れだし、よかつた」

(よくわかんないけど……………これってトジャヤヴ?)

アリスは海の方向へ体の向きを変え、つま先立ちにならへりこの伸びをしてから一息置いて呟く

ア「綺麗……………」

夕焼けで海一面が淡い紅茶色になつて輝く。今この海の水を飲んだら美味しいかもしれないなんて錯覚を不意に起こしてしまつくらい、美しかつた

奏は無言でベンチから立ち上がりアリスの横に立ち、それから暫く一人はこの美しい景色に目が離せなかつた

肩が触れそうで触れてない微妙な立ち位置の一人。傍から見たら恋入同士だと思われても不思議じやない雰囲気まで一人の周りには漂つている

「さて、そろそろ行くか」

ア「そうね…………」

アリスはまだこの景色を見ていたいようだが、日も落ち氣味だから少しばかり寒くなつてきているので、仕方なくアリスはベンチに置いてあるパンの袋を抱き抱える

そして二人は現在の家である生徒寮へ歩きだした

ア「また見たいね…………」

## ゆづくまつたりほづくり

じめじめして薄暗い、蠟燭の微かな明かりにだけ照らされている部屋  
冷たく堅い石畳が敷き詰められていて、その床には魔法陣が描かれ  
ている

そんな黒魔術の儀式に使われそうな部屋に魔術師が着ている真っ黒  
のローブ、年代物のシワの刻まれた大きな杖を右手に持った人影が  
入って来た

「…………とうとう現れました…………」

ぶつぶつと囁くその人影の左手には蒼い宝石が握られており、その  
宝石を魔法陣の中心に置き、宝石の上に杖の先を落とした

ローブのフードを脱ぐと中から美しい桃色の髪が現れた

「…………一族の誓いを、私が果たす事になりました…………」ま  
たぶつぶつと、今度は呪文を唱え始めた。すると魔法陣が輝き、ロ  
ープと美しい桃色の髪が靡く

杖を上に掲げ呪文を唱え、杖を宝石に突き刺した

すると部屋が魔法陣の輝きによつて一気に蒼く明るく、しかし大きく  
大気が揺れる

「…………ツ…………」

いきなり宝石が光り輝き、部屋を飲み込むように強く光を放つた……

（奏の部屋）

「今日も休みだが何しようかなー」

ベッドに横たわっている奏。部屋は昨日の買い物によつて少し景色  
が違つ。そして景色を変えてる物の一つ、昨日ククリの店で貰つた  
モノを手にとつた

「（Jの籠手……不思議だよな…………）」

自分の前に掲げまじまじと見つめる奏。確かに籠手の、その古びた  
外見からは不思議な雰囲気を醸し出している

「んー、嵌めてみつか」

両手に嵌めてみてわかつたこと。それは

「も…………モフモフや…………」

古びた外見からは考えられない、とても柔らかい毛皮のよつた感触が奏の両手を包みこむ

「しかもかなり軽いし動きがしなやかだ…………」

嵌める前の重さはなかなかズッシリしていたのだが嵌めてみるとそれは全く感じさせない、嵌めていないと言つていいくらいに軽く、指も動く

奏はベッドから起き上がりシャドーボクシングを始めました

シユツシユツシユツシユツシユツ……

小刻みに拳を繰り出す。

シユツシユツシユツシユツシユツ……

ノリノリで拳を繰り出す。

シユツシユツシユツシユツ……

「ふふふ…………俺は最強…………俺は最強…………これならマリーにも余裕で勝てる…………打ちのめして俺に従えてやるぜ…………ふふふ…………」

不意に部屋の入り口、ドアの方から嫌なオーラを感じた奏。シャドーボクシングにノリノリすぎて気づかなかつたが、そこにはマリーが居た

マ」

マリーは無言だ。このどうす黒い、蚊を雰囲氣で殺せやうな、この嫌なオーラは恐らしくマリーにしが出せないであろう……

「こひやじひて、二、一にマセサ、せ」

マリーは反応しない

そ、その椅子にでも座っててくれ、お茶だすから……」「

マニマニ風応しなし

ま、まりーすわあん……」

マリーは反応しない

奏は筆手を外し棚に置き、ゆうぐりつま先歩きでマリーの裏にある  
ドアへ向かった。終始マリーの田線を感じる奏だが、そこは気にし  
なようにしている。が、冷や汗が止まらない

そしてドアノブに手をかけ部屋を出る瞬間、それは叶わぬ夢となつた

ビクッと固まる奏。それをよそに続けるマリー

マ「私を従えるなんて……………」100年早いわー。」

ドスン。ドスン。と形容したらしいだろうか、鉛のような重さの雰囲気を纏ったマリーの両脚が奏に一步、また一步とゆっくりとしかし確實に近づいていく

一方の奏はと、マリーのその威圧感に恐怖し、泣きそうなまでに引き攣った顔をしながら一歩、また一歩とマリーの両脚が近づくのに合わせて尻餅ついたまま後退る

そのとき、ドアの開く音が耳に入った。奏の部屋のドアを開けたのはハーレイだった

彼の眼に飛び込んできた映像は若い男女がくんずぼぐれつでいて、しかも女性が知り合いの男の両腕を押さえ付け上に股を開いて乗っているではないか

健全な若者がその状態を見て何も思わないはずがなく、彼もまた何かを感じ取り、知り合いの男の部屋のドアをその顔に笑みを浮かばせながら静かに閉じた

「…………チクショウ」彼が扉の向こうでそう呟いた

一方の一人はと、突然の来訪者に驚き、マウントをとつたまま暫く固まっていた。そんな中、先に声を発したのはマリーだった

マ「見られ……ちやつたね……」

少女は頬を朱らめ、自身の両手でその頬を隠すよつとおつた。「てへつ」という仕草もセツトにして

「何が「てへつ」だよー絶対勘違いされたよー明日気まずいじゃん！そして俺の上からどいてよー」奏は解放されている両手でマリーを軽く押し退ける。あくまで軽くだったのだが自分の世界にトリップしている隙だらけマリーの体勢を崩すには十分すぎ、そのまま後ろに倒れ込み今度は奏がマリーを襲う形になってしまった

ちなみに奏が押し退けるた部位は肩であり、決してたわわに実った悪魔の果実もとい円周率に使われる俗称記号の名前に似ているモノではない

「あ……メン……」

マ「…………うん」

押し倒された体勢のマリーは顔を更に朱らめ恥ずかしそうに頭を横に向けた。まるで初夜を迎える少女のように

「マ、マリー……その……」

マ「…………なあに……？」

顔を奏に向け、かわいらしく聞く。美が付く少女がやるととてもない威力である。例えるなら官能的な状況で鼻血が垂れて来てしまうなんて古くから使われている表現を地でいけるくらいのかわいさ。そんなマリーに奏がかける言葉はといふと

「気持ち悪い」

だつた。さすがのマリーでも奏の遙か斜め上をステルス機で駆け抜けるが如く反応で口を開けてそのまま啞然としてしまつた

「こつものマリーからこんな姿作るのはこへらなんでも無理があるぞ……」

マリーはとこつとケロロッと表情をこつもの明るい顔に戻し奏に向き立つ形で体勢を立て直す

マ「やっぱ私はこいつのはダメかなー？」

頭を縦に振り一言返事で返す奏。更にこつ続けた

「こへらなんでも唐突すぎるよ。他の男なら一発ノックアウトだらうけど……で、今日は何の用なマリー？」

さつきのアレが全部演技だとするとかなりの悪女を演じれるほどの中量であった。そしてマリーは奏からの問いに応えた

マ「今田は買い物行くわよ。それよりその箒手はどうしたの？」

マリーは奏の肩まですっぽり覆っていた古傷だらけ、しかしあふもふの細身の箒手に注目し尋ねた

「昨日アリスと街に出てね、その時買つたんだ

マリーはふーんと鼻を鳴らし、その場に立ち上がり奏を催促する。奏は呼びかけに反応し立ち上がった

「で、買い物つて何処行くんだ？」

マ「まあついて来なさいなー、奏くんつ」

奏とマリーは学園を出て街へと向かった。

街は学園から歩いて10分ほどと、かなり近い。生徒達も気軽に、そしてすぐに行けるときで街には若い人間も多く今日も休日も相成つて俄然活気に溢れていた

「ツツツツツ。街中で靴底と石畳の狭間で小気味良い音を躍り鳴らしている中に一人も歩いていた

「なあマリー。街についたしそうそろ何処行くか教えてくれよー」

奏は頭の裏で手を組み、自身の隣を歩くマリーにぶつかりながら投げ掛ける

マ「そうね……今日は私の知り合いがやっている鍛冶屋さんに行くのよ

「鍛冶屋？」

マ「そう、鍛冶屋。あなたつてば魔法使えないじゃない、だから護身用にいろいろ作つて貰つよう頼みに行くの」

「ふーん。でも魔法相手じやあんまり意味無いんじやないか？」

マ「ふつふーん。奏くん、今から行へるのは私の知り合いの所よ？」

豊満な胸を反らし白濁気な口調で鼻を鳴らすマリー。奏もそれに納得し軽く一、二度頷く

それから暫く歩き住宅街、商店街から少し離れた工業地帯へ着いた二人。この街「レイシユノット」には川「リヴァイバル」が通つており、その川が住宅・商店街と工業地帯とを一分している。この川の名には由緒ある由来があり、その昔、この地にあった街がモンスターの大群に襲われ壊滅的状況に陥つたさい、一人の戦士が訪れたそうな。

その戦士は剣士であり、剣を抜き、一振りするだけで百以上のモンスターを消したらしい。

そして一日とかからず街を壊滅的状況に追いやったモンスター達を殲滅し、民を助けた。その後に彼は懐から一つの石を取り出し大地上に落とすと、それは遙か彼方まで届く光り輝く一つの道を造り、それは輝きを無くすと水の道に変わつたそうな。

街の長が礼を告げる前に彼は去つてしまい、そしてその水の道は民に潤いを与える、街を建て直すために必要不可欠であった。いつしかその水の道を民は復興・復活の意を込めて「リヴァイバル」と呼ぶようになつたそうな。

そうマリーが教えてくれた。マリーによるところの地域に古くから伝わる伝説らしい。これが真実かどうかはわからないが。

マ「ほら、着いたよー！」

マリーが指差す先には周りにある建物より一際大きい建物がこれでもかといつほどに存在感を示していた

中からは外にいても十分に聞こえる程の怒声が幾つも耳に張り付く。

一歩入るとさつきまで感じなかつた熱気がぶわっと体を包み、職人達から発せられてる怒声も更にひどく耳につく

そんな中、マリーは慣れた様子で奥へ進んで行く。奏が遅れてマリーの背中を追つていくと鍛冶場の一番奥には一つ渡り廊下があり、どうやらその向こうにマリーの知り合いといつ鍛冶職人がいるらしい

渡り廊下にでるとさつきまでの熱気は何処へやら、辺りを見回すと大きいの庭の中に渡り廊下と屋敷が存在しているとわかつた庭は日本庭園に近い形で、

かなり手入れされているらしく見栄え良く整っている

渡り廊下を進むと大きい一階建て屋敷が一軒。これまた趣のある屋敷であった

屋敷の中から何かが聞こえることに気付いた奏。耳を澄まして聞いてみるとそれは楽器の音色だと聞いてとれた。恐らく弦楽器だろう。とても美しい旋律で素人の奏でもかなりの腕前だとわかる程に巧い。ついつい奏はその美しい旋律を立ち止まって聴きこんでしまつていた

マ「ヴォルフイ、中に入るわよー？」

マリーは掛け声と共にすかずかとヴォルフイと呼ばれた人物の屋敷へ上がり込んでいて、マリーの声でやつと奏は美しい旋律の世界から放たれた。そして慌ててマリーの後を追つた「お、おいまリー。勝手に入つていいのかよ……」

小声で問い合わせるがマリーは頷き、それだけで奏の問い合わせを済ませてしまった。彼女はもう一度この屋敷の主のらしい名を呼ぶが返事は無い

彼女は屋敷の中を我が物顔で進む。びじどし進む。幾つか部屋を覗くが家主は見当たらぬので、一階に行くことに。したらば旋律がさつきよりもはっきりと聞こえることから、一階にいることは間違いないさそうだつた。

マ「あ、いたいた。ちゃんと返事してよな、ヴォルフィー」

マリーは家主を見つけたらしく、先程の呼びかけに反応が無かつた事に不満を漏らしている。家主は楽器から一旦離れ、その場にすつと立ち上がつた

ヴ「いやあ申し訳ない。すっかり世界に入っちゃって気づかなかつたよ」

照れ臭そうに頭をかきむしる。家主はいつも来客とは違う存在に気づき、振り向くと握手を求めるとき同時に挨拶を交える

ヴ「はじめまして。この屋敷の主、そしてこの街の鍛冶職人をまとめてる「ヴォルフィーレ・ラリイ・フットガル・ストリーシュ」です。私の名は長いからね、彼女みたいに略してくれて構わないよ」

ニコリと優しい笑顔を向けてくる。まるで親が子を見るように。奏も家主に自己紹介し、一礼した。緊張のせいか物腰はすこし固い

ヴ「昨日言つてた例の彼だね、マリー？」

ヴォルフィーレがマリーに向配せするといへりと頷き返した

マ「じゃあ、今からお願ひね」するとヴォルフィーレは奏に服を脱

ぐように指示した。どうやらサイズをピッタリにするため今から採寸するようだ

胸寸を測るヴォルフィーレの頭が奏の間近に、ほのかに香る匂いは微かに甘い。ヴォルフィーレの姿、それは美をそのまま具現化したような、完璧としか形容の方法が無いほど。そんなヴォルフィーレの白銀の、すこし長く伸ばした髪からひょこっと飛び出しているものが一つ。位置からするとそれは耳のようだ

「あ、あの……」

ヴォルフィーレのひょこっと飛び出している耳、それは人間のものにしては長く、尖っている。不思議がる奏はついつい疑問の声を漏らしていた

ヴ「ああ……僕はエルフなんだ」

自身の耳に対する奏の疑問にそぐわないようにそう答え、視線は上げずもうすぐに終わるであろう採寸を続ける

「人間以外の種族を初めて見ました……」

ヴ「まあこの街は比較的種族にオープンだからいろいろいるけど中でもエルフってプライドが高いからね、あんまり人間と一緒に居たがらないんだ。人間はこの世界で最弱卑怯の種族、エルフは狩りにも戦闘にも富んだ高等種族、ってね。私はいろいろと人間と付き合っている間に良いところも十分に知つてね、だからあんまりそういう意識が無いんだ。エルフにしては珍しく、人間の世界で住んでいるんだけどね」

大まかに自身の種族について奏に説明し終えたと同時に採寸も終わり、ヴォルフィーは全身を採寸して得られた数値を紙に書き留め、まとめた。着替えを済ませた奏達と一緒に紙を持って一階へ降り、一階の一一番奥にある小さな自宅鍛冶場へと向かった

「じゃあ早速取り掛かるとしよう。マリー、悪いけど奏くんも連れていつも通り向こうで寛いでいて欲しい。そうだね……30分もからず終わらせるつもりだから居間にでも居ててくれると助かるよ」  
そう言い残しヴォルフィーは鍛冶場の火をつけ、早速作業に取り掛かる

「じゃ、お言葉に甘えさせてもらひつゝで寛ぎましょー」

奏の肩を後ろから押す形で、じこじこくる途中にあつた屋敷の居間へぐいぐい押しやるマリー。居間へ着くなり奏を屋敷自慢の大きなソファに座らせ、慣れた手つきでお湯を沸かし紅茶を煎れる

「最近どうなの？」

ソファーに腰掛け、紅茶を口に運びながら近況報告を求めた

「どうして？」

霧のよくな、あまりにも抽象的な質問なので逆に問い合わせる形に

「そりゃアリスとかアリスとか、アリスとか？」

「アリス限定……しかもなんで疑問形なんだよ」

ティーカップで口元は隠れていて確認できないが目元を見る限りマリーがニヤニヤしている様子が取つて解る

「アリスとはなんもねえよ。期待に応えられなくてすいませんねえ」マリーはふうんと鼻を鳴らし、更ににやついている。奏はそんなマリーに何か嫌な予感を少なからず感じていた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2154/>

---

Roman holiday

2011年11月11日12時36分発行